

駒. zone vol. 12

特集 将棋の楽しみ方

新連載

『38』 清水らくは

【急募！内弟子リリィを将棋初段にする方法】 贅楽夢

短編小説

『スピードスター』 猫春雨

駒. zone ガールズ 完結！



目次

38

急募！内弟子リリイを将棋初段にする方法

贅楽夢 17

スピードスター

猫春雨 38

将棋短歌

43

駒・zoneガールズ 第六章

欠片食器 44

特集 将棋の楽しみ方

書く将棋の楽しみ方

清水らくは 19

誘惑

清水らくは 56

応援サイト管理人の楽しみ方

涓滴 21

あとがき

57

詰将棋の楽しみ

― 拡張していく思考、構造、あるいは盤上の生命 ―

会場健太 22

関西学生棋界探訪(1)

兆葉 28

表紙イラスト 若葉

(再掲) オーダー論考

清水らくは 34

登場人物

皆川許心女流初段（『五割・一分・一厘』『七割未満』）

佐土原杪女流1級

木田桜女流翔位（『レイピアペンダント』『七割未満』）

辻村充六段（『五割・一分・一厘』『七割未満』）

金本月子四段（『五割・一分・一厘』『七割未満』）

三東幸典五段（『五割・一分・一厘』『七割未満』）

1

連盟を出ると、雨が降っていた。降水確率は0%だったけれど、そんなものはあてにならない。

傘はない。かといって、中に戻るのは嫌だった。今日はもう、将棋の空気を吸いたくない。感想戦も終わったのだ。

どうしたものか、しばらく悩んでいた。そしてようやく一步踏み出そうとしたところで、気が付いた。誰かが、ずぶ濡れになりながら立っていた。背は低くノースリーブにミニスカート。髪は肩より短くて、鮮やかな、明らかに染められた茶髪。

なんでそんな人が、と思った。彼女は会館をぼんやりと見上げていた。とても整った顔だった。まるで作り物のように、完璧な美しさだった。そして私は以前にも、同じ感想を抱いたことがあった。

「杪ちゃん」

視線だけが、こちらへと動いた。そして、まぶたが閉じられた。肩が震えていた。

「杪ちゃんでしょ」

「皆川……さん」

「どうしたの。中に入れば」

いいのに。その言葉を飲み込んだ。佐土原杪。天才美少女棋士と言われていた。今でも美少女だ。でも……もう、棋士ではなかった。

「入れないんです。私、もうここには入れない」

顎が落ちて、私と杪ちゃんは正面から向き合った。雨だけではない水滴が、彼女の頬を濡らしているのがわかった。

「風邪ひくよ。とにかくどこかに入ろう」

「私……帰る場所もないんです」

「えっ」

「あるけど……ないんです」

彼女の家は、大金持ちだと聞いたことがある。幼い頃から多くの習い事をしてきて、その一つが将棋だった、と。そして突然の引退は、海外で別のことをするためだと、そのように聞かされていた。

「紗ちゃん、あなた」

「すみません、こんなこと突然。皆川さんには何も関係ないのに」
紗ちゃんは、振り返って歩き出そうとした。私は駆け寄って、肩をつかんだ。

「関係なくはないよ。後輩なもの」

「私、やめたんですよ」

「やめたって後輩は後輩……と思う」

私は鞆からタオルを出して、紗ちゃんの頭を拭いた。髪の毛が少しだけ黒い。

「……いいですか」

「何？」

「頼って、いいですか？」

その声も、美しかった。私は少し嫉妬しながら、首を縦に振った。

「これがコーラ……」

紗ちゃんが、不思議な顔で泡立つ液体を眺めている。

あの後、私は彼女を自宅まで連れてきた。ずぶ濡れの少女を連れて行く店は思いつかなかったのだ。

「初めてなの？」

「甘い飲み物は禁止されてたから」

さも当然、という風に言うが、私には驚きだった。子どもの頃は、甘い飲み物で口封じされるのが常だった。

「それに、宅配のピッツアも初めて」

「そうなの」

椿ちゃんは、ピザの入った箱に興味を抱いていた。庶民にはわからない感覚だった。

「ところで」

「はい」

「なんで、帰る場所がないの」

紗ちゃんは、動きを止めた後に背筋を伸ばした。私も思わず同じ体勢をとる。

「ママはニューヨークに残っていて、こちらでは父のところから大学に通う予定だったの」

「はあ」

「でも、その……家には愛人がいて」

「ほお」

「しかもパパはあまり帰ってこなくて。私、愛人さんと二人で家にいることになってしまっ」

「へえ」

理解はできるのだけれど、全く感覚のつかめない話だった。ニューヨークがどこにあるのかから私は知らない。

「しかも、大学も勝手に決められたところで、いつの間にか入ることになっていて。もう、全てが耐えられなくなって家を飛び出して」

「それで、会館に来た、と」

「気が付いたらあそこに」

親を頼ることができず、所属する場所もなく、たどり着いた場所が将棋会館。すでに引退した紗ちゃんにとって、どんな意味を持つ場所なのだろうか。少なくとも私は、必要以上に行きたい場所ではない。

「それで、紗ちゃんはどうしたいの」

「どうって……」

いつでも正しいとは限らない。

「じゃあ、今度は自分で決めるのね」

「そうしたいです……でも」

「でも？」

「私、戻るのかな」

震える声。彼女は、問題をしっかりと把握している。

人気絶頂だったにもかかわらず、突然の引退だった。あまりにも早かった。宣伝効果を皮算用しており、裏切られたと思った人もいようだった。そうでなくとも、一度将棋界を去った人が、戻るの
は簡単ではないだろう。

たとえ彼女の本意ではなかったとはいえ、自らの意志で引退した人間が、簡単に戻ってくることはできないと思う。

「私も力になってあげたいけれど、すぐく力が小さいの。でも、絶対に状況を動かせる力が一つだけあるわ」

「状況を動かせる力？」

「もちろん、将棋の強さよ。強ければ、何かが起こる」

近年では、アマからプロへの編入試験が行われた。それも、プロに勝つアマが現れたからこそだ。プロとソフトの対局も大々的に行われた。ソフトが強くなったからだ。将棋界は、将棋の強い者とはかわらざるを得ない運命だと思う。

「そうですね。強くないと……」

テーブルに突っ伏して、紗ちゃんは深いため息をついた。本当ならそれは、今日の対局で負けた私がするはずだったことなのだけれど。

熱い。狭い。

違和感に、目を覚ます。狭いのは床の上に布団を敷いているから

「最もうまく事が運ぶなら、どうなったらいいと思う？」

以前、私がある人にかけられた言葉だ。ちなみに聞いてきた本人は、「名人として死にたい」と言った。

「私、棋士になりたい」

「棋士？」

「奨励会に入って、四段になりたいです」

予想外の答えに、すぐには言葉が見つからなかった。てっきり、女流棋士に復帰したいのだと思っていた。

「……それは、いつから？」

沈黙の後、ようやく尋ねることができた。紗ちゃんは、視線を落とす。

「最初からです」

「最初から」

「小学生の時。プロを目指すと決めた時から」

覚えている。とても小さくて、可憐な女の子が、大会に出ていた。私は運営の手伝いをしていただけで、どうしても彼女のことが気になってしまった。もちろん見た目のこともあるけれど、対局中の目つきが他の子とは違った。「勝ちたい」ではなく、「ひねりつぶしたい」といった、凶暴な目つきだった。

「じゃあなんで、女流に」

「親に決められたんです。私のことは、全部親に」

言い終わると、紗ちゃんは唇をかんだ。

棋士の多くは、早くに人生の選択をしなければならない。小学生の頃からプロを目指すのだが、それがどういう意味を持つことなのか、はっきりとわかっていない子だっているだろう。私だって、女流棋士の生活なんてよくわかっていなかった。そして、プロになってもほとんど強くなっていくものだと思っていた。

親に選択を委ねるのは、多くの場合賢いやり方だと思う。ただ、

かと思ったのだけれど、熱いのは理屈がわからない。

目の前に、こんもりとした山があった。布団を引っ張ると、頭が現れた。

杓ちゃんだ。まあ、他には考えられなかったのだけれど。

彼女はベッドで寝かせたはずだった。ただ、理由がわからないわけではない。

彼女の肩に手をそえた。遠い遠い記憶の中で、そうしてもらった記憶があったから。

「百万円あれば足りるでしょうか」

思わず私はのけぞった。冗談かと思ったけれど、そんな顔ではなかった。

「買うとしたら足りないわね」

「え、いえでも、頭金とか礼金とかいろいろかかるって聞きましたし……」

私たちは今、電車で揺られている。杓ちゃんが、家を探したいと言いだしたのだ。とりあえずいったんは自宅に帰るように説得したのだけれど、彼女は折れなかった。

「あそこは、私の家ではありません」

幼かった頃の自分への戒めか、とにかく親の言いなりにはならないという意志が感じられた。とはいえその百万円は親からもらっているんじゃないかと思ったが、そういうことは指摘しないことにした。今の彼女に必要なのは、正論ばかりじゃないだろう。

電車を下りて、改札を抜ける。壁に背をつけて、本を読んでいる女性が見えた。

「木田さん」

本のタイトルは、「五手詰め三昧」。ストレートの黒い髪に真っ

黒な瞳、ジーンズに青いシャツという格好。見た目は地味だが、彼女は若手で唯一タイトルを持つ女流棋士、木田桜女流翔位だった。

「あ、本当だ。金髪姉妹だね」

木田さんは、杓ちゃんを見るなりかくかくと顎を上下させた。実際に見るまでは、私の話を信用できなかったのだろう。そして、私と杓ちゃんの頭を見比べている。正確には杓ちゃんは、明るめのブラウン。

「あの、お久しぶりです」

「久しぶり。元気にしてた？」

「えっと、まあ、だいたい」

木田さんは本を鞆にしまうと、杓ちゃんの両肩に手を置いた。

「我慢しないでいいから」

「……はい」

木田さんは少しぶっきらぼうだけど、基本的には優しい。なんというか、人に意地悪をしたりするのをイメージできない人間である。

「それにしても皆川さん、私を不動産屋と勘違いしてるんじゃない」

「え、いやー、そんなことないよー」

実は、私の家を探すときにも木田さんに手伝ってもらったのだ。

まあ、もう一人いたんだけどあいつには今は声をかけづらい。

「で、佐土原さん。どんな条件で探すのよ」

「あの、とりあえず、百万円以内で」

「……何が？」

頬杖をついて、今後のことを考えている。

杓ちゃんは、お風呂に入っている。私は部屋に一人なのに、誰かと一緒だということに慣れていない。まあ、ルルはいるけれど。ルルは、小型犬らしからぬ落ち着きで座布団の上に鎮座していた。

いろいろと部屋は見て回ったけれど、今日はまだ契約までは行かなかった。そもそも紗ちゃんはお金を持っているものの無職の未成年だ。簡単に住みたいから住めるというものでもない、と思う。

そもそも、少し頭を冷やしたら、自宅に帰ることになるんじゃないか、とも思っている。若い時は情熱だけで行動してしまいがちだ。いろいろと現実を知れば、反省せざるを得ないことも出てくる。家の多くは、帰る運命にある。

ただ。時には、帰らないことで大きな成功をつかむこともある。そういう例を知っているだけに、悩ましいのである。

あとは、別の問題も考えている。紗ちゃんがもし全てを許されたとして、その後だ。果たして、彼女にどれだけの力があるのだろうか。奨励会試験に合格できるのだろうか。昇級・昇段できるのだろうか。二十三歳までに初段にならなければ退会、という規定がある。それを考えると、彼女にはあまり時間がない。

彼女の成績も検索してみた。通算成績十一勝十八敗。勝率、三割八分。正直、もっと勝っていると思っていた。何せ、私は負けている。

ちなみにアマチュア時代は、プロに対して五勝二敗。ある棋戦では、本選二回戦まで進んだ。その時のイメージが鮮烈なのだ。

棋譜も並べてみる。

きれいな居飛車党だ。勝つ時はすごく強い気がするけれど、負けるときはもうい。気分屋なのだろうか。

空白の約二年。彼女は将棋とどのように向き合ってきたのだろうか。海外では、実戦相手を見つけるのは難しかっただろう。とはいえ、今はネットでいつでも対局することができる。

当時のことを思い出す。普通の女の子として、テレビの人気者になりかけていた。まださらさらの黒髪がなびいていて、とても上品な子に見えた。それでいてしつかりとしているし、将棋の宣伝も忘

れなかった。

ただ、出来過ぎた人は一部の人から嫌われるものだし、将棋界の方も少し打算的なところが見えすぎたのではないか、と思う。とりあえず佐土原さんと呼んでおけば、みたいなイベントもいくつかあった。

当時から奨励会を目標としていたならば、紗ちゃんにとっては大変な日々だったのではないだろうか。もちろん、女流棋士になった時点でいろいろな覚悟はしていたと思う。それでも、いろいろと予想外だったろう。

「お風呂、ありがとうございます」

水色の寝巻を着た紗ちゃんが、リビングに戻ってきた。ルルが、首だけそちらに向ける。私の寝巻を着た人が出てきたので、一瞬驚いたようだった。

「ねえ、紗ちゃん」

「はい」

「一局指そうか」

目を見開いた後、紗ちゃんは口角を上げた。

「はい」

テーブルの上には、布製の盤。持ち運びが便利で、どこでも広げられる便利なものだ。駒は、ちゃんとしたものを駒袋から出す。初段になった時に、ある先輩棋士が贈ってくれたもの。

「振るね」

駒を並べ、歩を五枚手の中に収めて、シヤカシヤカとかき混ぜる。私は、この行為が好きだ。振り駒は万人に平等である。

と思いたい。と金が五枚。私の後手である。

紗ちゃんの手が、七七へと伸びる。細くて白くて、とてもきれいだった。私の手は少しカサカサしている。

ルルが、テーブルの上に移ってきた。物珍しそうに盤面を見てい

る。そういえば、誰かと対局する姿は見せたことがないかもしれない。

局面が進んでいく。紗ちゃんは当たり前の手も、ノータイムでは指さない。少なくとも十秒は考えている。確認しているというよりは、頭の中に刻み込んでいるように見える。

こんな顔だったつけ、と思う。もちろん茶髪になったり、大人びてきたりはしている。それ以上に、私の知っている佐土原女流1級とは、違う気がするのだ。その理由を考えてみて、恐ろしい可能性に行き当たってしまった。普通はそんなことはありえないのだけれど、あの頃の彼女ならないとは言い切れない。

視線は鋭く、口元も引き締まっている。彼女は二人きりの部屋で、見られることを意識していない。だから、美少女である必要がない。推測にすぎない。すぎないけれども……

盤上は激しいことになってきた。お互いに玉が露出している。詰む詰まないまで考えないといけない局面だ。

紗ちゃんは、目を閉じた。口笛を吹くように息を吐き出す。

そして、力強く放たれた手は全く予想していないものだったし、すぐには意味が分からなかった。虚空に放たれた、香車。次第にそれが、とんでもない手だということがわかってきた。こちらの攻めが制約されている。そして、将来こちらの玉が逃げ出す場所が狭まっている。

空間を掌握する手。じわりと首を絞められるような気分だった。それ以降は悪くなる一方だった。好手にはひれ伏すしかない時がある。

「負けました」

紗ちゃんは少し驚いた様子で、しばらくしてから泣きそうな顔になった。

「久しぶりに指せて、良かった」

「強いね」

「皆川さんが、引き出してくれたんだと思います」

謙遜なのか、本当にそう感じているのかはわからなかった。ただ、確かに私と対戦するときの紗ちゃんはいつも強い。

そして、私は感じていた。未来の可能性を。これは、いけるかもしれない。

「二十秒」

目の前で繰り広げられる激戦。A級棋士同士の対局は、ずっと秒読みが続いていた。つまり、ずっと私は秒を読み続けている。

突然入ってきた仕事だった。本来この仕事をするはずだった大田女流初段が、旅行先で飛行機が飛ばなくなってしまったらしい。確かに今南の島には台風が迫っている。昨夜電話がかかってきて、急遽テレビ収録に参加することになったのである。

「五、六、七、八、きゅ……」

強い棋士ほど粘る。十を読めば対局は終わり、それはなんというか、避けたい。指してくれ、間に合ってくれと心の中で祈っている。

その後三十手ほどかかって、終局した。私もへとへとだったが、対局者は二人ともぐったりしていた。そこにやってきたのが解説と聞き手の二人。ニコニコしているのは今一番会いたくない男、辻村だった。

さすがに放映時間がないので、テレビ用の感想戦はなかった。けれども辻村は二人に色々と聞きたそうであった。察して対局者が促すと、いろいろと新しい変化が出てくる。悔しいが、さすがだ。早指しではすでにA級棋士よりも読めているかもしれない。

「皆川さんから何かありませんか」

「えっ」

突然辻村に振られた。正直、実力が違いすぎて口をはさむ余地がない。

「一番近くで見ていましたし」

「あの……」

何も出てこない。そんな私のことを相変わらず眩しい笑顔で見つめてくる。

苦しかった。将棋のこともそうだけれど、今の辻村に笑顔向けられることが。

辻村には、彼女がいる。高校の同級生だった沖原さん。若くてかわいくて少し変で、棋士じゃない。

そんなことを、こいつは隠もしない。いつまでだって鈍感な子供だ。それでいて、今は強い棋士として、とても輝いている。

結局、仕事の間は何も話せなかった。声をかけられたのは、帰路につくときである。

「辻村、ちょっと聞きたいことがあるんだけど」

「え、なんですか」

屈託のない笑顔。ちよつとたじろぐが、続ける。

「天才って、どうやったら大成できるのかな」

「なんですか、それ。誰のことですか？」

「今は言えないんだけど……何とかしてあげたい人がいるのよ」

「普通に努力するしかないんじゃないですか。いい師匠に出会うか」

「師匠」

「まあ、俺たちは恵まれたとは言えなかったですけど」

私たちはどちらかというと、師匠に放置されていた。今ではそんな師弟関係も珍しくない。

そういえばまだ、杓ちゃんには師匠との関係を聞いていなかった。彼女の師匠は、亀山九段だったはずだ。正直、ほとんど接点がない。

「そっか」

「誰か、いい子がいるんですか」

「あ、うん。まあ、なんというか」

杓ちゃんのことはまだ話せない。きっと、騒動になってしまう。

「言えるようになったら、教えてくださいね」

どこまでも朗らかだった。普段それが私以外に向けられていると考えると憂鬱で、結果樹に色々と憂鬱になった。

「わかった」

辻村のおかげで、一つ前進した、気はする。私の笑顔は、ちゃんと笑顔に見えているだろうか。

「なるほどねえ」

ゆっくりとした、小さな声。この人はいつも穏やかだ。

「そこで、お願いがあります」

「何かな」

「佐土原さんの、師匠になってくれませんか」

「ええっ」

さすがの三東先生も、目を丸くして高い声を出した。

二人は今、洋食屋にいる。三東家の近くだ。連盟に近いと、他の棋士に出会ってしまうかもしれないと考えた。

三東幸典五段は、目立った成績はない棋士である。物腰が柔らかく、よく言えば温和、悪く言えばやる気がなさそうだ。実際かつては降級点を二回取って、順位戦からフリークラスへと転落する危機もあった。それでも最近は、勝ち越したりもしている。

成績や見た目は本当に地味な棋士だけれど、この先生には特筆すべきことがある。金本月子という、史上初の女性棋士を育てた師匠なのだ。

「佐土原さんの師匠は、亀山九段じゃなかったっけ」

「そうなんですけど……もう、連絡も取れないらしいです」

元々名前だけの師弟関係らしかったが、弟子が美少女棋士として有名になり亀山九段は鼻が高かったらしい。それだけに引退の決心を伝えた時はがっかりし、怒り、そして「僕らの関係もこれで終わりだね」と言ったらしい。

「そうか。まあ、仕方ないかもね」

「今の佐土原さんには、三東先生のような師匠が必要だと思うんです」

「そうかなあ。とりあえずは、僕には解決できない問題があるだろうしね」

「それは……」

「だから、本気で目指すなら、大物を動かさないと」

それはわかっていた。自分の都合で辞めた女流棋士が、奨励会に入るなんてのは前代未聞なのだ。ルールとかだけの話ではない。誰かが何かをしてくれないと、杓ちゃんが受け入れられることはないだろう。

「そうですね……」

「協力をするよ。でも戦略的には、別の人がいいんじゃないかな」

三東先生の言うことはもつともだった。けれども、杓ちゃんには、三東先生のような、親身になってくれる大人が必要だと思ったのだ。「それに、今は君が適任だと思うよ」

「え」

「ずっと皆川さんの家にいるんだろ。居心地が悪かったら、出ていくよ」

少しだけ、三東先生の目が鋭くなった。試されている、と思う。

「そうでしょうか」

「お金はあるんだから。欲しいものは別なんだよ」

三東先生の笑みは、とても優しかった。お金のない人にとっては、欲しいものに違いなかった。

気が付くと、家に物が増えていた。

ほとんど物を持たずにうちに転がり込んできた杓ちゃんだったが、どんな服や化粧品などを買いかんで、部屋の一角が華やかになっていた。そういえば、お風呂場には見たことのないコンディショナーやクレンジングが並んでいた。

「ルル、おいでー」

そしてなぜか、ルルが彼女になついていた。今まで見たことのない勢いで駆け寄っていく。なんだろう、納得がいかない。

「杓ちゃん、ちょっと」

「はい、なんですか」

膝の上にルルを乗せたまま、こちらを向く美少女。

「そろそろ動きださなきゃいけないともうの」

「……はい」

「ここにいるのはいいのよ、全然。でも、ただいるだけじゃダメ」
ただいるだけ、ではないのは知っている。将棋の勉強はもちろん、新聞を読んだりしている。将棋欄を観るため……ではなく、しばらく離れていた分、日本のことを知らなければ、ということらしい。

「わかってます」

「とにかく、道筋をつけなきゃ」

「道筋？」

「作戦。味方を多く付けて、杓ちゃんが奨励会を受けられる空気を作るの」

「空気」

「大事よ、空気」

正直、テレビの人気者となったうえで若くして引退してしまった
杓ちゃんは、一部のファンからもあまりよく思われていない。アイ
ドルのような扱いをされて、勘違いしてしまったのだと思っている
人もいる。問題は、それが事実かどうかではない。それが事実と思
われ続けるかどうかだ。

イメージの良い人はルールを変える力がある。そういう例は、今
までいくつも見てきた。

「いろいろ、考えておいて。どういうイメージで勝負するか」

「このままじゃダメですか」

「このままを売りにするのなら、あり。私もいろいろ言われるし、お
すすめはしないけどね」

杓ちゃんは、気付いて前髪をつまむ。

「一人、考えている人がいるけど……私だけじゃどうにもならない
から、時間がかかるかも」

「すみません、何から何まで」

「出世したらなんか頂戴ね」

でも、なんでこんなに面倒を見ているんだろう、と思う。でも、
私だからできることもあるんじゃないか、そう思うとせざるを得な
いのだ。今の私には、将棋で名を残すような力はない。けれども、
将棋界のためには何かできるかもしれない。杓ちゃんは、きつと役
に立てるはずだ。

テーブルの上で、ブルルと音が鳴った。電話だ。木田さんからだっ
た。

「はい」

「あ、皆川さん。今大丈夫？」

「うん」

「あのね、急なんだけど、明日研究会来れない？」

「えっと……うん、行ける」

「それでね、佐土原さんもつれてこれないかな」

「え」

「無理かな」

「ちよつと聞いてみる」

私が視線を向けると、杓ちゃんは目を丸くした。

「明日、研究会のお誘いがあつた」

「え、はい」

「杓ちゃんも」

「私？」

「そう。行つてみた方がいいんじゃない」

「……はい」

首の動きは小さかった。でも、横には振られなかった。

「うん、杓ちゃんも行けるって。あと一人は？ えっ、あ……そ
れはいいかもね」

木田さんの家は、少し変わっていた。一階部分は普通の1DKのよ
うになっているが、二階に八畳の和室が一つ。三階建てのアパート
が、二つの家に分かれているタイプだった。

「いらつしやい」

「不思議な感じ」

「最近引越したんだよね。面白いでしょ。畳はひいてもらったん
だ」

そして、和室にはすでに一人のメンバーが座っていた。背中
が丸まっていて、肩から二つのおさがが垂れている。顔は整ってい
るけれど美人というよりは美少女で、多分あと十年は少女に見える
のではないだろうか。

「久しぶり」

「あ……はい、お久しぶりです……」

四段になっても、妙におどおどしているところは変わらなかった。初めて女性でプロ棋士になり、そして今最も期待される若手の一人でもある。

「あの、初めまして。佐土原紗です」

「え、あ、はい、金本月子です……」

なぜか、紗ちゃんまでおどおどし始めた。彼女は見た目は派手にしているけれど、どこか弾けきれない感じがある。

「今わけあって皆川さんの家にお世話になっていて」

「え、居候……?」

「そうなの」

「えっと……やつぱり……借金があるんですか?」

「しやつ、きんつ?」

自分とは最も縁遠い言葉に、紗ちゃんは素っ頓狂な声を上げた。そういえば金本さんは、親の借金を返すために棋士を目指したのだった。

「あ、ごめんなさい……」

「いや、あの、お金はあるの」

私と木田さんは、顔を見合わせて頷く。見た目は正反対だけど、この二人はなんか似てる。

「そういえば、川崎さんは住んでないの?」

「住んでないし、前も聞かれた気がするよ」

「そうだったけ」

てつきり同居するために引越したのかと思った。ただ、私が辻村とのことでからかわれる時と違って、木田さんは川崎のことを聞かれると少しだけ複雑な顔をする。二人は、誰の目から見てもすごく仲がいい。この世界に入る前からの知り合いらしいし、お互いに好意があることを全く隠していない。けれども、確かにどこか恋人

同士とは違う雰囲気でもある。なんというか、兄妹みたいだ。

「さ、始めましょ」

盤、駒、時計などを配置し、四人でくじを引く。結果は私と金本さん、木田さんと紗ちゃんが対局することになった。

金本さんとは、これが三回目だった。初めては、ネット棋戦。当時奨励会員だった彼女と対戦し、負けた。彼女の實力を証明した、最初の女流棋士になってしまった。次は、雑誌企画の団体戦。関東若手チーム代表として、またも奨励会代表の金本さんと当たった。こちらも負け。

四段になった彼女とは、よほどのことがないと公式戦で当たることはできない。ゼビリベンジしておきたいところだった。

でも。今の實力差は、どうしようもなかった。一人の若手棋士として活躍が期待される金本さん。その一方で私は、女流棋界でもたいした成績を残せていない。もちろんそれでも、勝負が始まってしまえば一対一、何が起こるかわからない。とはいえ。

「負けました」

完敗だった。何もいいところがなかった。力が違いすぎる。

「あ、あの……」

勝っても金本さんはおどおどしている。

「駄目だったね」

「銀を打つところで角だと……」

「えっ」

すぐには、何のことかわからなかった。金本さんが指差している地点から、終盤の合駒のことだと分かった。確かに銀ではなく角だと、取られる駒が違うので詰めるが続かない。逆転するわけではないけれど、かなり違った。

「気付かなかった」

「ドキドキして……」

感想戦でも負かされている。これはつらい。

隣を見ると、木田さんが勝ったようだった。さすがにタイトル保持者。心配なのは、少し杓ちゃんの顔が白く見えることだった。

二戦目は、私と木田さん、そして金本さんと杓ちゃん。

私は、ずっと温めていた新手を使用した。まあ、最初に似た形で指したのは辻村さんだけだ。

木田さんが眉をしかめる。そして、足を崩す。正座が苦手らしい。そして、研究は生きた。相手の玉は詰める、こちらはまだ大丈夫。首を振った後、木田さんは頭を下げた。

対局が終わってから、心臓が苦しくなってきた。研究会とはいえ、やっとな勝てた。

「負け……ました」

そして、隣から投了の声が聞こえてきた。それは、杓ちゃんのものだった。

「え、あ、はい……えーと」

局面を覗くと、大差だった。完敗だったのだろう、金本さんもどんな声をかけていいのか困っていた。

「杓ちゃん、これが奨励会を抜けた力、みたいよ」

木田さんは微笑んで見せたけど、目はあんまり笑っていない。彼女は、奨励会試験に落ちたのだ。

「勉強に、なりました」

絞り出された声だった。

そんなわけで、杓ちゃんに勝ち星がないまま、最終局は私と彼女との対戦になった。空気に言えば、私にはチャンスである。

はずだった。

杓ちゃんの指し手はぐんぐんと伸び、昨日よりも完璧な指し回しだった。私は酸欠になるんじゃないかと言うぐらい必死に抗ったけれど、どうしようもなかった。

「強いじゃない……」

思わず言葉が漏れてしまった。完敗だった。

「なんか……なんか、手が伸びて」

「やっぱりね」

隣の対局も終わっていたようで、木田さんが盤面を覗き込んできた。私も隣を覗き返してみたが、金本さんが勝ったようだった。

「やっぱり？」

「あ、ごめん。皆川さんが負けたこととかじゃなくて、佐土原さんの問題のこと」

「私の……問題ですか」

「佐土原さん、ちょっとでも相手にビビると、転げ落ちるように悪くなっていくんだよね。睨まれたカエル、つてやつ」

杓ちゃんは、その言葉からも目を逸らした。確かに、いつものように凜とした感じが消えている。

「木田さんはわかるけど、金本さんにも？」

「人間だけじゃなくて、指し手とか、とにかく強さを感じたらだめなんじゃないかな。アマの時はそうでもなかったけど、プロになってからその傾向は感じてた」

確かに、アマの時の快進撃を思えばプロになってからは負けすぎている。しかも、負けるときはだいたいひどい棋譜だ。

「でもちよつと待って。じゃあ杓ちゃんは私に対しては……」

「そうなるね」

「え、いや私皆川さんのことすごい尊敬してますしそのあの」

杓ちゃんは、私に強さを感じていない。人間としてビビられるのはどうかと思うけど、将棋においては残念な話だ。ただ、悲しいかな納得はできる。

「あ、あの……」

黙って様子をうかがっていた金本さんが、申し訳なさそうに口を

はさんだ。

「おなかすいたので……ピザを取ったりとか……どうですか？」

私と木田さんは顔を見合わせた後、思わず嘔き出した。本日三連勝、美少女をビビらせる最強の棋士がこの金本月子なのである。

「疲れましたね……」

「え、あ、うん。そうね」

今二人は、大阪に来ている。私の仕事があるのだけど、ついでに杓ちゃんもついてきたのだ。

私たちの顔を知る人もいないだろう、と堂々と歩いていたら、何回も声をかけられた。ナンパである。振り向くと、視線の先は杓ちゃん。まあこれだけきれいなんだから、声もかけられよう。ただ、隣にも美女がいることを無視しすぎではないか、とちよつと憤慨している。

「この近くだったと思うけど……」

正直、大阪はほとんど土地勘がない。普段は新大阪―大阪―福島のリートばかりを移動している気がする。

「あれじゃないですか」

「あ、本当だ」

ビル三階の窓に書かれているのは、「金森将棋センター」という文字。ここは、最近できた将棋道場なのである。

狭い階段を上がっていく。三階に着き、廊下へと進む。扉には、「誰でも歓迎！」と書かれていた。

「失礼しま……」

「あ、いらっしやい」

「ちよつとすみません」

私は、開きかけた扉をすぐに締めた。

「杓ちゃん、あなたはやつぱりいい方が」

「え、急にどうしたんですか」

「会わない方がいい人がいたのよ。近くにマックがあったでしょ、あそこでも待ってて」

「そんなあ」

本当は、金森さんと直接話をさせたかったのだけど、そうもいかない。最も会ってはいけなさそうな人が中にいるのだ。

「ホテルに戻っててもいいから。とにかくここはいったん私に任せ」

「……わかりました」

杓ちゃんは、しぶしぶこの場を後にした。気を取り直して、再び扉を開ける。

「すみません、失礼します」

「どうしたの？」

「あ、ちよつと電話が」

金森さんは、私より一回り位年上の、気の良さそうな男性だった。ただ、ニコニコしている眼の奥には鋭さのようなものも感じられる。

「そう。ん、ああ、そういうことね。急に来たんだよね」

金森さんには、事前に二人で行くことを伝えていた。道場が開く前の時間なので、他に誰かがいることは想定していなかったのだ。

「あら、皆川さんじゃないか」

「島津先生、いつもお世話になっています」

道場の中にいたのは、島津九段。元A級、タイトル戦三回登場の一流棋士である。しかも弟子と研究会仲間が理事で、棋界に大きな影響力を持つ人だと言われている。

「こんなところで会うとはね、はっはっは。今から帰るところだったんだけど、ちよつどいいや。皆川さんにも話そうと思っていたことがあってね」

「え、私に？」

島津さんは、ぎらぎらとした目つきを隠そうとしない。私をまっすぐに見据えて、ゆっくりと息を吐き出す。

「そう。最近東京の会館の近くでね、佐土原さんを見たという人がいて」

「……」

「海外に行く聞いていたんだけどね。まあそれはいいけど、彼女は引退した身だからね。しかも自分勝手にやめていつてね。どういう気かは知らないけれど、もし会うことがあれば、くれぐれも二度と将棋界にはかかわらないように忠告しておいてくれたまえ」

奥歯がこすれる音が、脳に響いた。けれども、どうにかできるわけじゃない。

「……はい」

「君だって悔しいだろう、この世界を否定した人間に戻られるのは。まあ、元々あの子は顔だけだったしね。じゃあ、俺は帰るよ」

その背中に、弾丸を撃ち込んでやりたかった。残念ながら私は銃を持っていなかったし、持っても撃てはしなかっただろう。大先輩なのだ。私の組織の、上の人間なのだ。私は、正会員ですらない。

「間が悪かったね」

「いえ、ああいう話があることを聞けて良かったです」

「そのポジティブさは重要だね」

そう、確かに今の私はポジティブだ。ここに来れば何とかなるんじゃないかと思っていたのだから。定家五冠の親友であり、義理の弟であるこの人に会えば。

ただ、敵方だって当然同じことを考えるのだというとは思いつけられなかった。

「それで、本題なんですけど。佐土原さんのこと」

「ああ、もちろんわかってるよ。あいつには伝えておく」

「ありがとうございます」

定家五冠には、プロ棋士ですらほとんど連絡することができない。携帯電話は持っていないし、自宅にはほとんどいないらしい。結婚もしていない、研究会もしない。対局や様々な仕事はきっちりこなすが、それ以外の場では目撃情報すらほとんどない。彼に確実に連絡を取る方法は、この金森さんに頼むことなのである。

「いい嗅覚をしていると思うよ。あいつはね、将棋を指したいと思う人間を拒まないから」

「本当ですか」

「その代わり、指したくない人間はすぐに見抜くよ。一番嫌がる負け方をするんだ。圧勝して見せたり、わざと詰まसानかったり」

それは、噂で聞いたことがある。定家は、相手を見て勝ち方を変える、と。普通の棋士にはそんな余裕がないのだけれど。

「島津さんのほうは、まあつまんない話だからね。あいつも興味示さないだろうね」

「そういうものですか」

「そういうものだよ」

予想外のことはあったものの、何とか目的は果たせそうだった。これで、伝えるべき片方は何とかかなりそうだった。残りもう片方に向けては、今から戦略を練らなければならない。

「とはいえね、やっぱり本人の覚悟も見ておきたいからね。明日のこの時間、もう一回来れる？」

「えーと、はい、大丈夫です」

「オッケー。できるだけ人が入ってこないようにしとくよ。まあ、確実じゃないけどさ」

「助かります」

「僕も見てみたいんだよね。大逆転が、実現する過程を」

金森さんは、
すごく楽しそうだった。私より、
よっぽどポジティ
ブなのだろう。

つづく

【急募！内弟子リリイを将棋初段にする方法】

VOL. 1/100

贅楽夢

【零】

「——そもそも」

あぐらをかいた右足に頬杖をつきながら、吐き捨てるように彼女が言った。

八寸将棋盤を挟んで僕と対峙しているその少女は、将棋を指す者としてはお世辞にも礼儀正しいとは言えないし、高校一年生の女子としても決してお行儀が良いとは言えない。レッド×ネイビーのタータンチェック・プリーツスカート、白いブラウスに紺のカーディガン。制服風のフォーマルコーデだが、それを着こなしている当人はと言えば、神聖なる将棋盤を前にして立て膝をついての片あぐらである。将棋盤がなければパンツが見えていたに違いないと思うと少し残念……いやもとい、こんな態度ではせつかくの清楚なファッションが台無しだった。

不敬極まるこの娘に、これから僕は将棋を教える必要はない。将棋初段に、鍛えあげなくてはならない。

期限は三ヶ月。

それが僕に与えられたミッションであり、彼女はこの将棋教室に新しくやってきた生徒、というわけである。先が思いやられるような陰悪極まる自己紹介がひと通り終了して、さて何から始めたものかと思案する僕に向かって、ふんわりとしたショートカットのボブに包まれた端正な小顔に退屈極まりないという表情を浮かべながら、その少女——菊理璃莉は言った。

目の前の将棋盤を一瞥して、こう言い放ったのだった。

「そもそも、これのどこが面白いわけ？」

【一】

大手ゲーム製作会社に勤める八歳年上の従兄弟から、タブレットPCのIP電話アプリに着信が入ったのは今から一週間程前、ゴールデンウィークが始まる少し前の日曜午後のことだった。お昼に自宅で食べたレトルトカレーの残り香の中、デスクトップパソコンで将棋タイトル戦のネット中継を見てみると、隣に置いていたタブレットからアラートが鳴り始めたのだ。画面上で『引籠勝躁一郎』の名が点滅するのを確認した僕は、すぐに応答ボタンを押してビデオ通話の要求を受け取った。

「ワタルー、お前、将棋好きだったよなあー？」

挨拶もなしにいきなり用件から入るのが彼の流儀だ。しかも無駄に明るい。人生を楽しみ過ぎている。少しは落ち込め。年に一度でいいからショックでうなだれろ。

——それはさておき。

従兄弟の「将棋好きだったよなあ？」という問いに対する回答であるが、

「いや別に」

と言えば当然嘘になる。今も将棋観戦をしていたところだし、高校の将棋部に所属している。好きか嫌いかで言えば好きなのだろうが、正直、あまりにも小さい頃から当たり前のように将棋に慣れ親しんできたので、将棋を始めたきっかけなんて忘却の彼方だし、第一、自分は将棋好きかどうかだなんて自問したことすらなかった。「実は今、新しい将棋ソフトを開発していてなー。さっきベータ版が出来たところなんだけど、ちょっとモニター頼まれてくれない？」

躁一郎は、いつものように陽気な笑顔を、毎度のごとくばら撒きながら、そんなことを言い始めた。ここで言うモニターとは、勿論パソコンに接続するディスプレイのことではなく、発売前の新商品サンプルをお試しで使い、意見を言ったり問題点を指摘したりする臨時アルバイトのことであろう。

「……将棋ソフト？」

今更？と思う。コンピュータ将棋は、今から数年ほど前に時の名人が破れたことをきっかけに、その後は強いプログラムを開発することから、将棋というゲーム自体を「完全解析」する方向へとよりシフトしていつていると聞く。一般販売されるソフトといえば、定跡学習ソフトだったり、詰将棋ソフトだったり、初心者向けの入門ソフトだったりというケースがほとんどだ。変わったところではRPGやシミュレーションゲーム風にアレンジしたり、アニメキャラが登場して対局中にいちいち過剰な演出が入ったりするものまである。

要するに中級以下レベルの棋力のファンを”楽しませる”ことを主眼としているのだろう。ただ、僕は将棋盤と駒の感触が好きだし、ゲームではなく実在する人間と対局する行為そのものが好きなのだ。ネット将棋もたまにプレイするけれど、それはあくまで実戦経験を積むための訓練であって、将棋部での活動や大会での対局こそが僕の主戦場だと思っている。つまり、将棋ソフトなんぞに興味はない。他をあたって下さい。丁寧に断ろうとする僕に、従兄弟は陽気を通り越して狂気のような笑顔（どんな笑顔だ）を見せて押し売り行為を続行した。

「そう言うだろうと思ったよ……。だがしかし！ そう言うに違いないワタルだからこそ、この新作ゲームのモニターを頼みたいのさ」

世の中に、これほどまでにイラつく顔が他にあるだろうか？ という疑問を持たざるを得ないほどのドヤ顔をひけらかしつつ、従兄弟

は両手を画面上に晒してみせた。

ああ、これは。

ニュースの映像か何かで見たことがある。

得意気な彼の右手にあるのは「HMD（ヘッド・マウント・ディスプレイ）」。もう片方にぶら下がっている手袋のようなものが「TFD（タッチ・フィール・デバイス）」。

HMDのヘッドトラッキング機能により、頭を動かすとゲームの中でも同じように視界が動く。TFDを装着してゲーム内で触れたものはまるで実物と同じような感触を感じることが出来るのだという。

……つまり。

「そう。ワタルに紹介するのは。コンピュータ将棋が嫌い、リアル対局至上主義者の君にこそお勧めしたいのが！ 確認していないけど、多分世界初のVR型将棋教室体験ゲーム！ その名も『お兄ちゃん、わたしを将棋大会に連れてって♡』だ！」

ゲームの中身がどうであれ、少なくともタイトルだけはすぐに変更を検討した方がいいかもな。憎まれ口を叩きながらも僕は、（謝礼としてチラつかされた「今ならWeoマネープリペイドカード5万円分」という破格の条件に屈して）従兄弟からの申し出を引き受けたのだった。

……これが、悲劇の始まりだった。

つづく

書く将棋の楽しみ方

清水らくは

今号のテーマは「将棋の楽しみ方」です。現在、いろいろな楽しみ方があり、いろいろなファンがいます。本試では多くの方が作品を発表していますが、「書く」のも一つの楽しみ方だと思います。もちろん「読む」のも。

今回は、特に将棋を楽しんでいると思う方に原稿を依頼しました。皆様、自分なりの楽しみ方があり、そしてそこから他の人が楽しむことへとつながっていると思います。

さて、私は指すのも観るのも好きですが、やはりここでは「書く」についてお話してみたいと思います。

これまで将棋についての小説を何本か書いてきましたが、私のなかでは大きく二つに分けて考えています。一つはプロが出て来るもの。私はプロではないので、気持ちの面などでいろいろと想像しながら書くことになります。もう一つはプロが出てこない、アマチュアが登場するもの。こちらは自分の経験などを反映させやすいですね。

実は、本誌の第一号で、私は両方のものを書いていました。連載作品『七割未満』はプロの世界を舞台としており、短編読みきりの「ベース・オブ・シークレット」は少年少女が将棋を指す物語でした。そして実のところ、書くのに苦労したのは後者の方なのです。

『七割未満』はそれまでの長編二作、『レイピアペンダント』『五割・一分・一厘』の世界を引き継いで書いています。その二作に関しては、設定などで大変苦労しました。というのも、将棋の世界は「無観客試合」がほとんどなのです。棋士は会館で観客を入れずに対局しますし、その様子はテレビ中継されません。情報は棋譜

という形で知るわけですが、そこからは指し手しか知ることができません。観戦記もありますが、対局場で起こる細かいことまでは書かれていない場合が多いです。

プロの作家の場合、現場を見学させてもらったり、監修が付いたりします。ですがアマチュア作家にはそれができません。その意味でプロ棋界を小説化するのには、ちよつと大変だったのです。

ですが、劇的に情報は増えます。まずブログを書く棋士が現れ、それまで知ることのできなかつた対局での出来事や対局後の様子、普段の過ごし方などがわかってきたのです。そしてツイッターを始める棋士も多くなりました。また、順位戦の速報のみならず、モバイル中継によって、リアルタイムで対局の様子がいろいろと発信されるようになりました。

取材しなくても得られる情報が増えたことによって、アマチュア作家でもプロ棋界のことを書くことが容易になったと思います。もちろんプロ棋士の実態はそれでも謎が多いですが、そういうところは想像で補完しても楽しいものです。あと、有名な将棋漫画の作品で「さすがにそれはないだろう」ということが多く描かれてきたため、少々の誇張などは許される雰囲気もある気がします。え、それはない？

そんなわけでプロ棋界のことはどんどんわかってくるのですが、アマ棋界の情報は意外と少ないのです。以前沖繩の高校を舞台にした小説を書いたのですが、そこでどんな大会が開かれているか、どんな部活動がされているかなどは、ネットを調べてもよくわかりませんでした。ツイッターなどでも、まめに部活動のことを報告するアカウントは少ないんですね。もちろん自分が所属していた部のことならわかるのですが、それって全体から見ればごく一部なので、私にとってアマチュア棋界こそ「大いなる謎」なのです。

意識していたわけではないのですが、気が付けばプロ棋界を書く

ことが増えていました。ただ、ここで一つの問題が明らかになってきます。「現実の方がいろいろなあつて面白い」のです。私はできるだけオリジナルのキャラクターとストーリーにしようと思つていましたが、現実の棋士たちは個性豊かで、毎年さまざまな面白いエピソードが生まれます。現実こそ面白い……これはプロの創作者も悩んでいる問題かもしれませんね。

そこで書き始めたのが、「近未来のプロ棋界」を舞台とした作品でした。今後どうなっていくのかわかりませんが、プロ棋界も形を変えていくはずですよ。それを自分なりに予想して書いてみる。これはなかなか楽しい作業でした。ソフト、サイボーグ、そして宇宙人未来の話なので出し放題ですよ。

まだまだ、書きたいことはたくさんあります。将棋のことを書くということは将棋に興味を持つことであり、将棋の可能性を考えることです。その中には、「起こらなかった過去」も含まれているでしょう。書こうと思ひ始めた時点で、存分に将棋を楽しむ運命にあるのです。

とはいえ、いろいろ調べてキャラもプロットも作つて……と小説のハードルは高い、と感じる人も多いでしょう。そこで皆様、将棋短歌はどうでしょうか。本誌ではこれまで、多くの将棋短歌を掲載してきました。私もチャレンジしてきましたが、楽しいものです。

……実は最初は大変でした。一号あたりまではテーマを決めて作っていたのですが、そもそも「将棋」というテーマがあるので、二重のテーマに縛られて作っている状態でした。しかしその後多くの方に寄稿してもらえるようになり、自由な作品が掲載されていく中で「ああ、色々な形があるんだな」と気付かされました。

短歌は、「場面」を切り取ります。ですから指すだけでなく、観ているときに印象に残ったものが作品の土台となります。もちろん

慣れてくるとそれなりの制約などに悩むことになるのですが、書き始めには何ものにもとらわれない作品の輝きというものがあります。たとえばこのような作品を創りました。

十年後君の手元に戻るから迷わずに僕突き捨てていい

これは駒の気持ちを表現したわけですが、なんというか、そう考えると素直な作品です。今ではいろいろ考えてしまうところですが、当時は確信を持つて「十年」という言葉を使えたんですよ。どんな言葉も迷わずに使える時期というのは短い気がします。知らないうちにどんどん作品を創ると、面白いものがぼつと出てくるかもしれません。

将棋詩もあります。これはしばらくは私しか書いていませんでした。

多分ですが、皆様も昔は授業などで詩を書いたのではないでしょう。私、学校では全く褒められませんでした。でも、書くのは楽しかったんですよ。

詩は、自由度が高いです。リズムも設定も思いのままです。そこが難しくもあるんですが、うまく行つたときは「言葉と仲良くなれた」気がします。

将棋は指し手も見ても心が揺さぶられます。その「揺れ」が言葉になり、表現になり、詩になります。

他にもエッセイも書きましたし、俳句などいくつかは挑戦してみてもいいかもしれません。将棋が楽しいから書くのが楽しい、書くのが楽しいから将棋が楽しい。将棋と文芸の幸せな関係が今後も続いている、と思つています。

応援サイト管理人の楽しみ方

涓滴

「応援サイト管理人です」。藤井猛九段へメールを出すときは、いつもこのタイトルにしています。

私は藤井先生応援サイト管理人です。応援サイトを立ち上げるような人種はちよつと変わっています。応援サイト管理人としての「将棋の楽しみ方」、誰の参考になるのかとても不安ですが、ちよつとだけ語らせてください。

私はいつからか、将棋のゲーム性よりも、棋士に惹かれていました。観戦記などを片手に棋士の心情を絡ませて将棋を見ると、そのドラマ性に雄叫びを上げるのです。ボクシングは「動」のスポーツ、将棋は「静」のスポーツ。ボクシングに見る汗ほとばしるやり取りが、棋士の脳内でそのまま行われているのだと思っています。

そんな世界で独自の戦法を創り上げ、竜王にまで登り詰めた棋士「藤井猛」に、完全に惚れました。

2000年頃、最初の藤井先生応援サイトがありました。そのサイトは凄かったのです。藤井先生がファンと触れ合っているのですから。「座右の銘はなんですか？」

「歳寒くして然る後に松柏の凋むに後るるを知る」

間接的とは言え、ここで初めて藤井先生とやり取りをしました。

6年後、自分が受けた恩恵をなるべく他の藤井ファンにも味わって頂けるように、自分でサイトを作りました。コンセプトは「藤井先生と藤井ファンの架け橋となること」。

応援サイトは、決して対局や研究のノイズになってはいけません。よって、藤井先生の写真を掲載するたびに許可を得る訳にもいきません。

「このようなサイトをやっていきます。写真を掲載するために、公

認としていただけると嬉しいです」

「応援ありがとうございます。サイト公認させていただきます。

写真の掲載もです」

手紙を書きました。藤井先生と私の、直接的な、初めてのやりとり。

サイト上では、色紙のプレゼント企画、サイン本企画、藤井先生のご旅行写真掲載など実現することができました。

これはちよつと楽しいです。「あれほど厳しい世界に生き、魅力的な将棋を指す棋士が、ファンに対してこれだけ優しい」ということを藤井ファンにも感じていただけるのですから。私は先生でも学芸員でもありませんが、誰かに藤井先生の魅力を知っていただくことは、なかなか楽しいものです。

ただ、自分の小心つぷりを悔っていました。まったく企画をお願いできなかったのです。いくつかの企画は藤井先生の方から持ちかけてくださったもの。自力で良い橋を架けることができず、申し訳ない気持ちもあります。

そんな訳で、冒頭のようなメールのやり取りも、もうなくなってしまうしました。しかし、イベントでお会いする機会があれば、他愛のない会話をさせていただきます。

棋士とファンは切って離れた世界。管理人だからという特権もあるはずがありません。近づきすぎた訳でもなく、離れた訳でもなく、藤井先生との距離感是一定に保たれつつ、藤井将棋はずっと魅力的で、藤井先生は相変わらず優しいのです。この感覚をサイト開設から今までずっと保ててきたのは、ちよつとだけ良かったなと思います。小心者なだけなんですけどね。

応援サイト管理人ならではの「将棋の楽しみ方」、ちよつとだけでも伝わりましたでしょうか。

詰将棋の楽しみ

— 拡張していく思考、構造、あるいは盤上の生命 —

會場健大

さまざまな点で、詰将棋と文学はよく似ていると思うことがある。たとえば、詩のような詰将棋がある。パズル性や難解性を排除し、駒の動きの叙情性だけを静かに楽しむ態度で作られた詰将棋である。哲学としての詰将棋もある。そのような作品は、たとえば「駒がある」とはどのようなことなのか、将棋盤の空間はどのように規定されているのか、といった洞察に満ちている。俳句のような詰将棋もある。さまざまな使用駒制限や初形、終形の制約など、形式のなかでこそ表現される美も追求され続けている。もちろん、数学や論理学のような詰将棋もある。幅広い表現を許すことは、詰将棋の美德のなかでもっとも強調されるべき点であると思っている。このあたりのことは、以前駒・zoneに投稿させていただいた「鑑賞物としての詰将棋作品論」に詳しい。今回は、そのとき触れられなかった詰将棋のある面についてご紹介したいと思う。それは、△としての詰将棋である。

この△という表現は、詰将棋を文学と対比させたいがためだけの比喩的表現ではない。ここ数年で発達してきたある種の詰将棋は、文字通りの意味でサイエンス・フィクションの世界を切り拓き続けている。その話の前に、詰将棋の論理的構造について触れておく必要があるだろう。特に長編詰将棋においては、繰り返し趣向といわれるものが手数的大半を占めることになる。



今村修 詰将棋おもちゃ箱 (2001.8)

▲ 7 四龍	△ 8 六玉	▲ 8 五龍	△ 7 七玉	▲ 8 七龍	△ 6 八玉
▲ 7 八龍	△ 5 九玉	▲ 6 九龍	△ 4 八玉	▲ 4 九龍	△ 3 七玉
▲ 3 八龍	△ 2 六玉	▲ 2 七龍	△ 3 五玉	▲ 2 五龍	△ 4 四玉
▲ 3 四龍	△ 5 三玉	▲ 4 三龍	△ 6 四玉	▲ 6 三龍	△ 7 五玉
▲ 6 六龍	△ 8 四玉	▲ 8 六龍	△ 7 三玉	▲ 8 二龍	△ 6 四玉
▲ 8 四龍	△ 5 三玉	▲ 7 三龍	△ 4 四玉	▲ 4 三龍	△ 3 五玉
▲ 3 四龍	△ 2 六玉	▲ 2 五龍	△ 3 七玉	▲ 2 七龍	△ 4 八玉
▲ 3 八龍	△ 5 九玉	▲ 4 九龍	△ 6 八玉	▲ 6 九龍	△ 7 七玉
▲ 7 八龍	△ 8 六玉	▲ 8 七龍	△ 7 五玉	▲ 8 五龍	△ 6 四玉
▲ 9 四龍	△ 5 三玉	▲ 8 三龍	△ 4 四玉	▲ 4 三龍	△ 3 五玉
▲ 3 四龍	△ 2 六玉	▲ 2 五龍	△ 3 七玉	▲ 2 七龍	△ 4 八玉
▲ 3 八龍	△ 5 九玉	▲ 4 九龍	△ 6 八玉	▲ 6 九龍	△ 7 七玉
▲ 7 八龍	△ 8 六玉	▲ 8 七龍	△ 7 五玉	▲ 8 五龍	△ 6 四玉
▲ 6 五歩	△ 5 三玉	▲ 8 三龍	△ 4 四玉	▲ 4 三龍	△ 3 五玉
▲ 3 四龍	△ 2 六玉	▲ 2 五龍	△ 3 七玉	▲ 2 七龍	△ 4 八玉
▲ 3 八龍	△ 5 九玉	▲ 4 九龍	△ 6 八玉	▲ 6 九龍	△ 7 七玉
▲ 7 八龍	△ 8 六玉	▲ 8 七龍	△ 7 五玉	▲ 8 五龍	△ 6 四玉
▲ 3 八龍	△ 5 九玉	▲ 4 九龍	△ 6 八玉	▲ 6 九龍	△ 7 七玉
▲ 3 四龍	△ 2 六玉	▲ 2 五龍	△ 3 七玉	▲ 2 七龍	△ 4 八玉
▲ 7 八龍	△ 8 六玉	▲ 8 七龍	△ 7 五玉	▲ 8 五龍	△ 6 四玉
▲ 7 八龍	△ 8 六玉	▲ 8 七龍	△ 7 五玉	▲ 8 五龍	△ 6 四玉

まづ101手詰

本作の龍の動きが龍追いと呼ばれる趣向手順になるが、特に龍が逆回転に転じて以降は本質的に同じ龍の回転によって局面が進んでいくことがわかるだろう。このような長編詰将棋はその構造によってモデル化し分析することが一般的である。本作でいえば、その構造は単一趣向の繰り返し構造ということになる。趣向部分をAと書くとする。

$A \times n$ (nは繰り返しの回数)

で表されることになるだろう。長編のもうひとつの構成法として、趣向の足し算も考えられる。たとえば、龍追いを何周か追いかけてから、馬鋸に舞台が切り替わるというのも可能である。そのように別々の趣向を独立にくつつけたものは、

$A \times n + B \times m$

のように書くことができる。より近代的な構造としては、かけ算の構造が挙げられる。2種類の趣向が独立ではなく、互いにかみ合う歯車のように関係する構造である。代表的には、有名なミクロコスモス（橋本孝治、詰パラ1986.10）がある。1525手のいまなお最長記録となっている手数を支えるのは、と金送りによる置駒変換を繰り返し、ある特定の条件のときに馬鋸が1ステップだけ動くという構造である。このような構造に従うと、馬鋸の必要な繰り返し数一回ごとにと金送りを複数回繰り返さなければならないので、作品としては

$A \times n \times B \times m$

ということになって飛躍的に全体としての繰り返し回数が増える。さらに繰り返しの構造を劇的に更新したものととして、べき乗の趣向が挙げられる。これはばか詰の世界で最初に実現され（オリジナル

は「寿限無」加藤徹、詰パラ1975.9）、その後普通詰将棋でも作例が得られている。次に挙げるのは、そのばか詰の最発展形である。

▲なし

1	龍	香	馬	歩	歩	歩	歩	歩	歩
2	龍	香	馬	歩	歩	歩	歩	歩	歩
3	龍	香	馬	歩	歩	歩	歩	歩	歩
4	龍	香	馬	歩	歩	歩	歩	歩	歩
5	龍	香	馬	歩	歩	歩	歩	歩	歩
6	龍	香	馬	歩	歩	歩	歩	歩	歩
7	龍	香	馬	歩	歩	歩	歩	歩	歩
8	龍	香	馬	歩	歩	歩	歩	歩	歩
9	龍	香	馬	歩	歩	歩	歩	歩	歩

銀手の数▽

「寿限無3」

加藤徹 詰将棋おもちゃ箱1999.4
ばか詰1999手
作意手順略

本作の詰上がり図はこうである。

▲なし

1	龍	香	馬	歩	歩	歩	歩	歩	歩
2	龍	香	馬	歩	歩	歩	歩	歩	歩
3	龍	香	馬	歩	歩	歩	歩	歩	歩
4	龍	香	馬	歩	歩	歩	歩	歩	歩
5	龍	香	馬	歩	歩	歩	歩	歩	歩
6	龍	香	馬	歩	歩	歩	歩	歩	歩
7	龍	香	馬	歩	歩	歩	歩	歩	歩
8	龍	香	馬	歩	歩	歩	歩	歩	歩
9	龍	香	馬	歩	歩	歩	歩	歩	歩

銀手の数▽

つまり、これを実現するために敵玉に☞の香を拾ってきてもらい、それを合駒で渡してもらって☞に打つのが最短の詰みということになる。敵玉を王手の連続で☞に送るためには、☞から抜けてもらって、横並びになっている歩を順々に突いていくしかないが、初期配置では全ての歩が上がっているために玉が移動するスペースがない。これを全て（正確には、5、7筋以外）下げておくことによって玉の経路を確保するのだが、二つ問題がある。一つは、ある筋の歩を下げるためには、そこまでの経路上の歩を下げておかねければならないということであり、もう一つは、その操作によって、下げた歩より左の歩は全てまた上がってしまうということである。したがって、たとえばある3枚の歩を下げようと思えば、そのプロセスは次のようになる。

×××
 ×××
 ×××
 ×××
 ×××
 ×××
 ×××
 ×××
 ×××
 ×××

ということ、2の3乗＝8ステップかかることになる。本作では8筋、6筋、4筋、3筋、2筋、1筋の6枚の歩を下げる必要がある、しかも4筋、3筋、2筋、1筋は2段ずつ下げる必要がある、戻るときには2段一気に戻ってしまうので、2の10乗で1024ステップの繰り返しを行うことになる。このような構造は「再帰型構造」と呼ばれる。これは自分自身の趣向の内部で自分自身を呼び出すからである。このことは、プログラム風に記述すると理解しやすい。☞枚の歩を全て下げるためのメソッドを寿命無(☞)と書くことにする

と、

寿命無(☞) {

if(☞ > 1) 寿命無(☞-1);

☞番目の歩を下げる;

if(☞ > 1) 1、(☞-1)を上げる;

if(☞ > 1) 寿命無(☞-1);

}

のように書くことができる。メソッドの定義である(☞)内に定義されるところのものであるメソッドそれ自体が出てきていることに注目されたい。コンピュータの計算過程ではその行に入るたびに自分自身を参照することになる。これが再帰と呼ばれる所以である。

さて、ここまですでに長いまぐらの話である。詰将棋の構造が単純な足し算から始まって、かけ算、べき乗となっていくにしたがって、最終的にはプログラムのような構造にたどりついたことが理解されただろう。ここから詰将棋がSFになっていく。近年、繰り返し趣向を捉えなおす試みが行われている。その最たるものが、拡大盤を用いて盤上のリソースを豊富にすることで、繰り返し趣向の新たな意味を模索するものである。提案者の糟谷祐介氏は2014年の論考『「茫々馬」と「百千帰」の解説 (5) 諸作品観の変革』(http://toybox.tea-nifty.com/memo/2014/03/post-1535.html)のなかで次のように述べている。

繰り返しだけではダメ。繰り返し可能と証するだけでもダメ。特に拡大盤を許容するとこれらのダメさが際立つ。よって、「あるユニットを繰り返すことに比重を置き、繰り返し機構（繰り返しに意味を持たせる構想を含む）には道具的価値のみ

を認める」という思考法には明るい未来が無いと思う。(勿論新しいリズムの創出という道が残されているが、そういうのは音楽やダンスに任せておけばよく、詰将棋の役割ではないという気もする…)。ここにきて、私たちは今一度「なぜ繰り返すのか」という問いと向き合うことを迫られているのである。

(中略)

結論から言うと、繰り返し趣向は繰り返し部分の道具的価値を探る方向に進まざるを得ないと考える。

この道具的価値とはどのようなものになるであろうか。それは糟谷氏も具体的に論じてはおらず、長編作家それぞれが各自に向かい合っていないかなければならない問いであるように思われるが、糟谷氏が詰将棋自体の本質と拡大盤の必要性について考察している部分はその方向性を指し示すものであるように思われる。

詰将棋の本質を、駒捌きの妙といった表面的な問題から背後の思考・夢想に取り戻そうとする立場からすると、日々の創作活動は人間の凡そあらゆる精神活動との関連の中に捉え直すことができる。そして、この思索を徹底するためには、**詰将棋が究極的には人間性の発露を受け入れるほどの器を持たなければならぬ**という思いに至る。

(ibid. 強調は筆者による)

人間性の発露。非常に難しい問題であるが、これに答える作品がすぐに現れた。それがSoga氏の詰将棋コンピュータである(2014.4 web fairy paradise 70号 pp.12-15: <http://www.dokidoki.ne.jp/home2/takuji/WFP70.pdf>)。図面を作成することができなかったので、リンク先を参照いただきたい。この作品においてはこれまで強

調されてきた「構造」がそのまま計算機として機能することが示されたのである。たとえば第一問においては、詰将棋の構造自体がプログラムであると解釈することができ、次のように書ける。

持歩を「一枚増やす操作を「INC(歩, 〇)」と書き、持燕(筆者

注: 禽将棋の駒)を減らす部分を「JZDEC(燕, i, j)」と書く」とにします(ただし、「i」は足し算・引き算に成功したときの次の操作の番号を表し、「j」は引き算に失敗したときの番号を表す)。

このとき、今回の配置は、

1: JZDEC(燕, 2, 詰み)

2: INC(歩, 3)

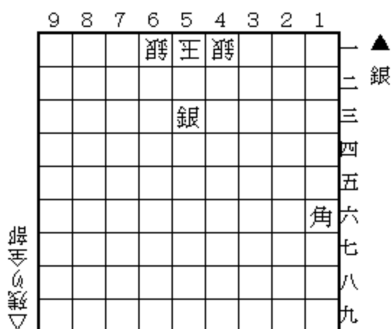
3: INC(歩, 1)

という配列だと解釈できます。

(Soga, web fairy paradise 72号 p.32: <http://www.dokidoki.ne.jp/home2/takuji/WFP72.pdf>)

ここまででは単にひとつの具体的なプログラムの形式を与えたに過ぎなかったが、そのすぐあとには任意のプログラムを組み込んで実行することのできる詰将棋コンピュータが発表された(web fairy paradise 74号 pp.50-72: <http://www.dokidoki.ne.jp/home2/takuji/WFP74.pdf>)。ここでは、仮想プログラム言語KR2を用いるアイデアが導入されている。KR2では、任意のプログラムの配列を、固有の手順によって置換した一つの自然数として表現する。この枚数の歩(正確には、歩Bと呼ばれる駒)を持ち駒とした詰将棋が、そのプログラムを組み込んだ計算機として機能するという仕掛けである。詳細は私の理解を超えるので、原文を当たりたい。この詰将棋コンピュータはとりあえず実現可能であるということを示したもので、高度な計算の実用には向かない。作者のSoga氏自身が古典

的な3手詰(下図)を解く詰将棋コンピュータの必要手数について概算を行っている。



作者不詳

その概算の結果としては、この詰将棋を解くだけで

手程度かかる見込みだという。これは、1秒に1手並 $10^{10} \times 10^{10} \times 10^{100}$

べるとすれば「ブラックホールが一度蒸発してふたたび元通りのブラックホールができるまでの時間」のおよそ2乗程度かかる見込みだという。こういう一言で片付けていいのかわからないが、ロマンのある話である。プロ棋士がコンピュータに負けたりして、将棋ファンの中には少なからず動揺した方もおられただろうが、なんということはない、将棋それ自体コンピュータになりうるのだ。

もう少し早に舵を切った話をしておきたい。詰将棋コンピュータを完成させたSoga氏の次の目標は盤上の「人工生命」である (web fairy paradise 83号 p.57 : <http://www.dokidoki.ne.jp/home2/takuji/WFP83.pdf>)。神無七郎氏の解説 (web fairy paradise 94号

pp.3-4: <http://www.dokidoki.ne.jp/home2/takuji/WFP94.pdf>) によれば、コンピュータと生命は重要な点で繋がっている。少し長くなるが引用しよう。

生物の重要な特徴は「自己複製」ですが、自己複製にはどんな仕組みが必要か、1940年頃から数学的な研究が始まりました。そして、この分野で大きな業績を上げたのが、有名なジョン・フォン・ノイマンです。その結論をかいつまんで言えば「万能組立機」と「万能計算機」が合体すれば自己複製が可能という事になります。ただし、ここでの「万能」は自己複製とそれに必要な計算ができる程度に万能という意味で、何でもできる「全能」ではありません。

ノイマンは現実世界で人工生命を作ったわけではなく、巨大な格子状の盤を用意し、そこにルールを設定して、自己複製できる初期配置を示しました。

(中略)

さて、このノイマンの仮想生物を巨大盤詰将棋で再現できるか、少し考えてみましょう。詰将棋コンピュータが実現可能であることが示されたので、コンピュータ内に仮想生物を作るという方法もありますが、できれば盤上で目に見える自己複製を表現したいですね。

(中略)

20世紀は計算が生命に不可欠な要素であることが発見された時代です。『技術の発展に伴って、生命科学の分野で画期的な成果が続々と登場するようになったのは偶然ではありません。最近「DNAプログラミング言語」が考案され、細菌に人間の意図した作業をさせる研究も進んでいます。いつの日か将棋を指す大腸菌が作られないとも限りません。そんな時代に生きる

21世紀の詰将棋作家にとって、盤上の人工生命は最も挑戦しがいのあるテーマの一つだと私は思います。

こういう文章に接すると、本当にポジティブな意味で、詰将棋作家の妄想癖も行き着くところまで行き着いたという感慨を新たにする。いまのところ、こうした試みは拡大盤や特殊ルールといった将棋からの拡張からもたらされている。しかし、先述の寿限無がばか詰で最初に複雑な構造を実現して、その後普通詰将棋においても表現可能なことが確認されたように、このような果てのない夢もいつの日か普通詰将棋に部分的であれ取り入れられないとも限らない。なにせよ、拡張していく思考というものが詰将棋作家の武器であり、重力から離れて飛び立つ翼なのである。その思考は直接的に盤面自体も拡張していくようになり、コンピュータの実現に始まって人工生命すら夢見られている。皆様が将棋界の将来について思いを馳せられる際には、こうした詰将棋作家の生態についてもほんの少しお気に留めていただけると、ちよつぷり楽しい気分になれるかもしれない。

関西学生棋界探訪（1）

兆葉

1. はじめに

はじめまして、兆葉です。ちょっとした覆面を被っていますが、『駒・ZONE』はいつも短歌でお世話になっている人間です。

今回は編集長から「大学将棋について書いてほしい」という命を受けました。過去『駒・ZONE』には、編集長が大学将棋のオーダー論についてまとめた文章がありました。具体的に大学将棋に触れたものはほとんどありません。というより、棋界の専門誌を探しても、大学将棋について詳しく触れた記事は皆無と言ってもいいと思います。逆に言えば、大学将棋の内部事情は世間一般にはほとんど知られていないものと言っているでしょう。

ここでは、今季から関西地区のとある大学将棋部（仮に駒損大学と名付けておきましょう）の新入部員Zくんとその先輩Oさん、Nさんの会話形式で大学将棋の内情をお伝えしていこうと思います。…が、前提として各大学の紹介と大会の概要ぐらいはお伝えしておきたいので、先にそちらを済ましてしましましょう。

2. 大学紹介

・立命館大

言わずと知れた超強豪校。将棋大会の実績で推薦入試を受けられ

る制度があるため、各地方から強豪が入りやすいのが武器。但し普通入試で入学した強豪も多く、推薦生だらけという訳ではない。全国大会優勝回数はぶっちぎりで全国トップ。部内の順位戦によってメンバーが決められるが、何せ部員数が多いためその競争も大変熾烈である。

・京都大

こちらも全国大会優勝数回の強豪で、毎年立命館大と激しい争いを繰り広げてきた。他の強豪校に比べると部員数がとても多いという訳ではないため、チームというよりも個人で戦っている色彩が強い印象がある。つまり一般的な京大の印象がそのまま将棋部にも当てはまっているといえるだろうか。強豪が〇〇年在籍しチームを引っ張るのがここ数年のパターン。

・大阪大

全国大会出場経験があり、ハイレベルな関西地区の中で常に代表権獲得すれすれで争いを続けている古豪。将棋部には珍しく師弟制度があり、回生をまたいでも仲が良く下回生の育成に熱心に取り組んでいる印象だ。部員数や組織力は全国でもトップクラスで、合宿などの催し物も多い。一般的な阪大イメージと同様かなり真面目なカラーである。色々な意味で京大と対称的な存在だ。

・神戸大

30年ほど前に全国優勝経験があるものの一時期は〇級まで転落。しかしここ数年で次々と強豪が加入し、一躍代表権を争う存在に。特に入学後の棋力の伸びが高い傾向にあり、ここ数年で急成長を遂げた大学。

・大阪市立大

最近の採用者は少ないものの、立命館と同じく将棋推薦制度を備えており、十年ほど前には全国出場を果たした（その時は大阪大と大阪市立大が代表権を獲得。立命館大が代表を取れなかった珍しい年である）。その後は△級と□級を行ったり来たりしているが、最近強豪が次々加入し再び△級に。ちなみに個人戦の大会会場は大体ここである。

その他、同志社大、近畿大、龍谷大、大阪経済法科大、関西大、関西学院大、大阪工業大、大阪府立大、大阪経済大、京都府立大、京都産業大、桃山学院大、甲南大、和歌山大、兵庫県立大…などなど20校以上の大学が参加しています。

3. 大会紹介

次に、大学将棋界にどんな大会があるのか、ざっと紹介しておきます。

・個人戦

普通のアマ大会と同様、個人で争われる大会。春季の代表は学生名人戦、秋季の代表は十傑戦という全国大会への出場権を得る。個人戦は団体戦の前に行われるため、団体戦に向けて各大学の選手の情報を集める格好の場にもなる。後にも述べるが、団体戦においてはオーダーの情報戦が大変重要である。

・団体戦（一軍戦）

14人でチームを組み、7人制（4人以上勝ったチームが勝利）の団体戦を行う。もちろん各選手の棋力が一番大事だが、誰を何番手

で出すかというオーダーの並び順も勝負の鍵を握る。春季の代表校は富士通杯（5人制）、秋季の代表校は王座戦（7人制）への出場権を得る。関西は全国大会への出場枠が△枠あり、△級から□級に分かれ、20校ほどでリーグ戦を行いその出場権を争っている。

その他、新人戦や二軍戦、オール学生、大学主催の交流戦、その他一般アマ大会など様々な大会がありますが、ここでは割愛します。

4. 部室にて

Zくん「はじめまして！新入生のZです！」

O「あーどうも、話は聞いてるよー、強いんだって？」

Z「いや、二段ぐらいですかね…さつき将棋見てたんですが、OさんもNさんもすごく強いですね！」

O「まあ僕は初心者だけだね」

N「俺も」（※1）

Z「??????」

Z「…ところで駒損大学の将棋部って盛んなんですか？」

O「前期の大会で△級に昇級したで！」

Z「A級…？」

N「7人制で競われる団体戦があつてね、関西の大学将棋部が△の級に分かれて総当たりで競うんだよ。メンバー登録は△人だから、次は君もメンバーに入れると思うよ」

O「んで、上位△校が全国大会に出場できる」（※2）

Z「なるほど…ちなみにどこが強いんですか？」

N「関西の代表はここ最近はずっと立命館大と京都大。どちらも全国優勝までしちゃうからなあ…」

Z「全国の中でも強豪ということですか？」

N「そうだね。ちなみに他に最近全国優勝経験があるのは東京大、早稲田大、名城大ぐらいのものだね。」

Z「じゃあその2校の実力が抜けてるんですか？」

O「ところがどっこい、地区大会は毎回激戦なんだよね。大阪大、神戸大もかなり強いし。ここ七、八年は代表2校を立命と京大が独占してただけ、前回大会では神大が京大を下して全国に行ったよ」

N「関西は今一番激戦区なんだよね…。団体戦より先に個人戦があるから、それに出てレベルを実感するといいよ」

Z「なるほど…ありがとうございます！」

Z「ちなみに、部内では普段どんな活動をしているんですか？練習対局とかですか？」

O「部内でリーグ戦組んでるからよかったです。後は研究会かな」

Z「研究会かあ…プロみたいですね！」

N「後は…マージャンとかカタンとかスマブラとか？」（※3）

Z「??????」

O「あとはね、合宿があるよ。数大学が合同でやる場合もあるね」

Z「楽しそうですね！合宿というと海に行ったり観光したりですか？」

N「いや、将棋とボードゲームやるだけやで」

O「外行くのとか面倒やん」

Z「(将棋指すためにはるばる合宿に行く方が面倒では…???)」

N「まあ、基本的にはみんな部室に集まって適当に将棋指すだけだよ。講義の合間とかね」

O「あるいは講義中とか」（※4）

Z「??????」

O「他のサークルとか部活に比べるとあんまりお金がかからないのはいいところだよ。部費は大会参加費と本代ぐらいでほとんど実

費だし」（※5）

N「大学将棋はまず個人戦、そして団体戦だね。個人戦は各自頑張ってもらわないけど、団体戦の時は部から何か仕事をお願いすると思うから、よろしくね」

Z「分かりました！よろしくお願いします！」

O「じゃあ、早速一局指してみようか！」

Z「ハイ！」

※1 棋力を訊かれて「初心者」と答えるのは大学将棋界の決まり文句。

※2 枠数は地区による。上位二校の決め方は実はもう少し複雑だがここでは割愛。

※3 将棋指しは皆ボードゲームをこよなく愛するのである。

※4 将棋部に所属している大学生の留年率がかなり高いという説があるが真相は定かではない。

※5 年5000円ぐらいが相場である。

5. 団体戦会場にて

Z「もうすぐ一回戦が始まりますね！しかし、すごい人の数だ…あの人ばかりは何をしているんですか？」

O「ああ、あれは、各大学のオーダー表を写しているんだよ。対戦するとき、相手のオーダーが分からないと困るからね」（※1）

Z「なるほど…オーダーは皆が見られるように大将席の隣に置いておくんですね」

N「ほら、早く」

Z「えっ？」

O「写してくるのは君の仕事やで！新入生！」

N「僕は次の試合出るからね、いよいよ始まるよ」

Z「ハイ、行ってきます！」

Z「…あれ、Oさんは出ないんですか？部内で五番目ぐらいの実力と聞きましたが…。7人制なら普通は出場するんじゃないんですか？」

O「僕は4回生だし、同じか少し劣るぐらいの実力なら2〜3回生を出して来年以降の糧にしてみよう方がいいよね。あと僕の出る位置には向こうの2〜3番手が来そうだったから、ピンポイントで狩られるのを避けたのさ」

Z「ふむふむ：オーダー戦術ってそういうことなんですね。色々と考えてることが多そうですけど、誰が決めているんですか？」

O「最後に決めるのは主将だけど、事前にみんなで話し合って決めることが多いかな。オーダーが勝負を左右することはよくあるからね。一般大会の団体戦だと3人制でオーダー固定の場合が多くてあまり関係ないから、大学将棋特有の面白さかなあ。まあ、結局全員強ければ勝てるから、オーダーに凝るより棋力向上の方が大事なんだけど…」

Z「なるほど、オーダーの読み合いは大学将棋ならではのですね」

Z「…ところで、対局の後ろでバインダーを持って立っている人がいますけど、あれは何やってるんですか？見た感じJ級の対局全てに誰かついてますけど…」

O「ああ、あれは棋譜を取ってるんやで。後でその大学と対戦するときに役立つだろ？」

Z「え、全局ですか？駒損大学ってそんなに部員いましたっけ…？」

(※2)

O「いやいや、棋譜取ってるのは大体立命館大と大阪大やな。あそ

こは部員が多いから…」

Z「部員が多いとやっぱり有利ですか？」

O「棋譜取りとかオーダー写しに人数を割けるから対戦相手の研究もできるし、それはオーダー決める時に重要な情報になるよね。まあそれよりも、メンバー入りに向けた部内の競争が激しくなるから棋力も伸びやすくなる点の方が大きいか。まあ人少なくても強いところは強いけど…」

Z「関西の大学の部員数ってどんなもなんですか？」

O「立命や阪大はさくさく人いるんじゃないかな…関大や近大も多いね。部としての組織もしっかりしてて、ある意味将棋部離れしてるよね」

Z「将棋部離れ…？」

O「やっぱり少人数で適当に…いや、自由にやってるイメージが強いでしょ？」

Z「確かにそうですね…そういう大学もあるんですか？」

O「むしろそういう大学の方が多いよ。強豪だと京大なんかはそっち寄りかなあ」

Z「もともと京大には何となくそんなイメージがありますね…。」

Z「…あれ、僕らのように人数が少ない部は棋譜が取れませんけど、どうするんですか？」

O「全局棋譜を取るのは無理だから、戦型だけメモしておいて対戦の時に役立てるのが普通だね。居飛車党か振り飛車党か分かるだけでも大事な情報だし。初心者でもやりやすいように、局面図だけ写しておくようにしている大学も多いかな。ほら、これも君の仕事や！」

Z「分かりました！」

Z「…いやー、どこもすごい人で対局を観るのも一苦労ですねー」

O「部員はほとんど全員応援に来るし、たまにOBも来るからなあ…やっぱり大学将棋の中で一番規模が大きくて熱気のある大会だよ

ね、団体戦は。個人戦とは少し違った戦い方になるし」

Z「といいますと？」

O「やっぱりどんなに悪くなくても詰むまでは投げたくないよね…序盤は慎重になるし、中終盤は勝っても負けてもすぐには終わらない手を選びたくなるよね」

Z「うーん、少し分かりにくいんですが…。個人戦でも全力を尽くすのは同じではないんですか？」

O「同じだね。全く同じ。でも全然違う…。出た人にしか分からないけど…なんていうのかな、圧が違うね。出て雰囲気味わうだけで強くなれると思うから、出場目指して頑張るのはいいことやで。運が良ければ今回出られるかもしれないし」(※3)

Z「え、そうなんですか？」

O「最後の一戦を残して順位が決まったり、相手エースに捨て石でぶつきたりとか、そういうことはあるかも。メンバーに入っている以上、気を抜いたらあかんで」

Z「そうですね…ちよつと対局見えます！」

Z「…そろそろ初戦は全局終了ですかね。次もすぐ始めるんですか？」

O「いや、関西地区の持ち時間は30分プラス秒読みの秒だから、午前中は一局だけで次は昼休憩だ。昼は皆で食べに行くこともあるし、選手のために弁当を買ってくることもあるかな。オーダー練るためにも必要な時間だね」

Z「一日に3局消化するんですね。残りは来週に持ち越しですか？」

O「そうそう。他の地区はGWに二日連続でやったりするから、一週間空くのも関西独特かもね」

Z「戦いの途中に一週間空くのも何だか不思議ですね」

O「間は将棋のことしか考えられなくなるから、講義とかどこかに飛んで行っちゃうよね」

Z「……」

O「真面目なことを言えば、当たり前そうな相手の研究を深めることもできるね」

Z「やっぱり団体戦中は将棋中心になるんですね」

N「おう！対局終わったよー」

O「お疲れ。強い将棋だったな」

N「相手のことをZから聞いておいて良かったな」

Z「え、僕何か言いましたっけ？」

N「覚えてないのか？俺の相手、お前が個人戦で負けた相手だぜ？」

Z「あ、そうか…。そこから戦いは始まっていたんですね」

N「ま、そんなところだな」

O「次の対局も頑張ろうな！」

Z「ハイ！」

※1 オーダーの重要性についてはO.L.Sの「オーダー論考」(清水らくは著)を参照のこと。

※2 A級には6大学が所属しているため、自大学の対局を除いて棋譜を取ろうとすると14局分必要。一局につき一人棋譜取り係が付くのが基本なので、対局する人を合わせれば単純計算で21人以上が必要となる。なお、稀に一人で三局分取っている名人芸を見られたりもする。

※3 団体戦を描いた作品に「海の81マス」「駒箱の鍵」(ともに清水らくは著)などがある。

6. おわりに

かなり苦戦した結果、内容が薄く締め方も分らず非常に読み苦

しいものになってしまいました。いつかりベンジしたいと思います。大学将棋は、アマ優勝クラスの実力者がごろごろというほどレベルが高く、全国大会でも地区大会でもとても熱い勝負が繰り広げられています。また社会人や高校生以下に比べると自由な時間が長い分、将棋に取り組む上で圧倒的に環境が良いとも言えるでしょう。これまであまり紹介されて来なかったのが不思議です。ただ最近「将棋フォーカス」で取り上げられていますし、すこしずつ目が向けられています。

また機会があれば、大学将棋の魅力を伝える文章を書きたいと思っています。

(再掲) オーダー論考

清水らくは

将棋の団体戦には、独特の味わいがある。その中でも大学将棋の団体戦においては、オーダーの組み方が非常に重要である、という点が特徴的である。

五人ないしは七人で行われる団体戦では、オーダー順は固定ながら出場選手は対戦ごとに変更できる。つまり五人制だとして、

- 1 A B C D E F G H I J
- 2 A B C D E F G H I J
- 3 A B C D E F G H I J

上記のどのように出場させるのも可能である。しかし、多くの場合3のように飛び飛びで出場させることになる。もし1や2のようなメンバーが出ることになるとしたら、よほどの奇策かオーダーの組み方自体に問題があった、ということになるだろう。

では、オーダーとはどのように決められていくのか。とりあえず、あるチームがベストオーダーを組むまでについて眺めてみよう。以下、スーパーエース(よほどのことがない限り勝ってくれる強豪をS、エース(ほとんどの場合で勝ちを計算できる)をA、その他のレギュラークラス(エースに一発入ることもあるが、下に取りこぼしもするぐらい)をB、その他(力は足りないが人数の関係上登録されている)をCと表記する。

甲大学の場合

甲大学将棋部は、長らく人数不足の中一人のSが引っ張ってきた。

しかしSが四年生になった年、一年生に二人のAが入部してきた。他にも二人のBがおり、上位に入れる戦力が何とかそろった。しかし部員数は七人で全員出場するしかない。

オーダーを決めるに当たり、Sは四年生でもありスーパーエースであるという自覚から自ら大将を買って出た。そして新入生のA二人をその下に引き、結局は素直に力順に並べることになった。つまりは【S A A B B C C】である。

大会当日、二人のA加入により、下位校に対しては楽に勝ち、迎えた三回戦。いつも接戦で負けるα大学との対戦、相手校レギュラーの戦力は【A A A B B C C】であり、Sがいる分、甲大学が有利かにも思えた。

しかし、相手校には14人全員オーダー表を埋めるだけの部員がいた。この時点で、実は甲大学は不利に陥っていたのである。実際の対戦は以下ようになった。

甲 【S A A B B C C】
α 【C A C A A B B】

ここまでα大学は【A C A A B B C】というオーダーを組んでいた。しかし甲大学戦では、七将のCをはずし大将にCを入れてきた。このように相手の強豪に下位選手を当ててその対戦を半ば捨てることを「当て馬を当てる」と言う。

対戦をよく見ると、4 5 6 7将戦においてα大学の方が有利になっている。また副将戦もいわゆるガチンコ対決であり、期待値は5勝である。つまり恐ろしいことに、出場選手の総合力では甲大学が上回っているが、対戦した時にはすでにα大学が有利になっているのである。

甲大学が負けるとして、何が敗因だったのか。一つには人数不足

が上げられる。七人しかいないため、相手にとっては当てたい相手を確実に当てられてしまうのである。もし甲大学にたった一人でも控え選手がいたとしたらどうか。オーダー表に【CSAABBCC】と書いていたとしよう。そしてα大学戦で大将にCを入れたとする。

甲 【CSAABBCC】
α 【CACAABBB】

という対戦になる。これで大46将戦がガチンコになった。副3将戦は甲大学が有利であり、ガチンコ対決を2つものにすればチームが勝利できるという意味では、先ほどよりはましな対戦となっている。

α大学としてもこのようなケースを避けたいと考えれば、大将にCを入れるかどうか迷うことになる。一人人数が加わるだけで、相手にとっては大きなプレッシャーになるのだ。

甲大学の敗因はもう一つある。オーダーを素直に並べ過ぎたことだ。チーム構成上甲大学が考えなければならぬことはいくつもある。チームが勝利するためには最低でも四勝せねばならず、そのためには最低でもBBCCのうち誰かが勝利せねばならない。つまりこの四人が戦力となるような当たり方をせねばチームとしては苦しいのである。できればBはBかC、CはCに当たるような展開を作りたい。またSAAはできるだけ無駄にならない相手と当りたい。特に相手にSがない場合、自チームのSはAをつぶしておきたい。Aに関しては、Bに当てて確実にとりに行く、という戦略もある。まさに今回のα大学がするようにしたのである。しかし甲大学は出場選手を変更できないので、いかに相手に戦略を取りにくいオーダーを作るか、が大事である。並びを変えられないのにそのようなこと

が可能か、という問いに対しては、相手校が戦うのは甲大学だけではない、ということがヒントになる。

さて、ここで私が甲大学の部長だったらどのようなオーダーを組むか、ということを考えてみたいと思う。相手校との兼ね合いもあるが、とりあえずは以下のようなオーダーから考える。

【CASAABBC】

普通どのようにオーダーを考えていくのかは知らないが、私の場合だいたいこれが基本形となる。まずは大将から考える。各大学、当て馬については常に考えるものであり、一番上にはCを入れていくことが多い。最初からCを出し、重要なところで引つ込めてガチンコを仕掛けるという逆の戦略を仕掛ける場合もある。しかし、上に二枚Cを並べるということはしにくい。下の方でオーダー調節がしにくくなるうえに、二枚とも出す事態はなかなか生じないからである。また大将にBを置くのも少し勇気がいる。というのも、Bを外してCを入れるという戦略は、総合力が落ちるのでリスクな選択になるからである。大将でBを出すことは、相手校のSやAにやられ続ける代わり、固定の当て馬相手を確実に拾っていくという戦略になる。

そんなわけで大将のCは、「相手のSやAを空振りさせる」「Bなら頑張れば勝つこともあるかもしれない」「C同士ならガチンコになり御の字」という理由で、人数不足のチームでは損がないのである。

またASAと並べたのにも理由がある。相手校として見れば、Sに誰を当てるかが課題となる。できればBは当てたくない。Sがいるチームならば、ガチンコを仕掛けるかどうかもあるだろう。α大学のような場合、C(当て馬)を当てたい。ここで重要なのは、S

をAで挟んだ場合、当て馬を使うと、もともとSと当る予定だった人は確実にAと当るということである。実は先ほどもα大学は3将にCを入れていた。Sに当て馬を当てられるオーダーだったのだが、同様に当たった場合どうなるだろうか。

甲【C A S A B B C】
α【C A C A A B B】

甲大学はSをすかされたものの、大246将がガチンコになった。3将がほぼ勝ちであることを考えれば、かなりましになったと言えるだろう。しかしα大学がこれを避けようとする、「相手のCにAが当たる」もしくは「相手のSにAが当たる」事態はほぼ避けられない。上の方に控えメンバーを固めると、相手校も人数豊富な場合下の方で狙い撃ちされてしまう。相手が甲大学だけでない以上、オーダーは基本的には人数豊富な相手を考慮して組むものなのである。

オーダーを少し変えただけで、相手校の悩みがかなり増えたことがお分かりいただけただろうか。

乙大学の場合

メンバーを考える際には、棋力以外にも重要な要素がある。例えば乙大学では、C1とC2のどちらかが出場することになり、二人をどのような配置にして、どのようなパターンで出すかを考えなければならない。

C1は時折上に一発入れるがコロッと負けることもある三年生である。一つの考え方として、彼を当て馬大将に置くとする。すると相手校にとって、過去のことから名前を知られている可能性が高い。

Bを当てても確実に勝てるとは限らないとか、C同士だと不利になるのではないかと相手に考えさせるだけでも意味がある。

C2は一年生で、大会前の部内リーグなどでCクラスの中で一番いい成績を収めた。棋力で言えば一番期待ができるので、七将などですつと出すのも手である。また、確実に相手も当て馬を出すだろうときに大将で出すという作戦もある。しかし一年生にその役目を任すかどうかは悩むところである。たとえば初戦相手校の人数が足りず不戦勝になるような場合、C2の名前をあえて出しておき、「強い新人が入ったかもしれない」と思わせておくのも得になる。C1を下に書いた場合には、「ここであえてC1を不戦勝にさせ、C2を次からオーダーに入れるという作戦もある。C1よりも期待できる棋力だと相手は思いかもしれないし、最初のうちに新人に場馴れさせるためあえてC1を下げたと思われるかもしれない。どちらにしろ、少ない手駒で出来るだけ相手に悩んでもらった方が乙大学にとっては得なのである。

さて、乙大学にはもう一つ悩みどころがある。それはA1の性格である。彼は棋力はあるのだが、プレッシャーに弱い。そこで彼をどの位置に置くのかも重要になってくる。プレッシャーに弱いからと言って5将や6将で出してしまうのはもったいないし、何より相手校もそこにAクラスを当ててきたときに余計にプレッシャーを感じてしまう。一番考えられるのは大将である。なぜならそこは隣が一人しかいないので、戦況がわかりにくいのだ。副将はできるだけ安定した成績を残すA2、もしくは序盤が非常にうまいB1を考える。A1にとって比較的周囲を見回す余裕がある時間に隣が形勢を損ねることが一番悪い状況と言える。「自分が勝たねば」という思いを強くしてしまふからである。

とはいえ大将は他の作戦との兼ね合いも考えなければならぬ位置である。よって、次の候補は副将となる。できるだけSやAを隣

に配置し、下位の苦しい様子を気にさせないことに気を遣う。もしくは明らかに当て馬であるCならば、負けて当たり前なので気にすることも少ないだろう。また私のこれまでの経験上、3将や4将が意外と勝負将棋になることが多い。枚数が揃っていないチームにとつて、SやAを置いても当て馬を当てられにくく、そのうえ無駄が生じにくい位置が3、4将なのである。よつてAIをここに置くと常に大事な対局が続くことになる。大将・副将は相手が外してくれる位置であり、プレッシャーのかからない対局が生まれやすいのである。これ以外にも、戦型なども考慮することがある。対振り飛車が得意な人に絞らせないために、居飛車党・振り飛車党を交互に配置するというのも大きな意味のある作戦である。また「棋力よりも強そうに見える」ということすら作戦によつては役に立つ。見た目も大事なのである。

もしオーダー学と言うものがあるならば、今回書いたことはそのほんの一部でしかない。現役学生などはもつとずっと先を見ていることだろう。何にしろ団体戦というのは対局者だけで決まるのではない、オーダーをどうするかによつて大きく結果が異なるのだということを実感していただければ幸いである。

ス・ピードスター

猫春雨

タイムアタック。

いかに最短時間で攻略できるかを競うものである。

シズルもまた、タイムアタックに魅せられた者の一人だった。

初めて挑んだのは家庭用ゲームだ。

シューティングにアクション、果てはRPGやアドベンチャーゲームまで、最短での攻略に挑んで来た。

しかし高校生になるとそれも満足できなくなり、まだ大型二輪の免許を所得していないのに関わらず、非法法の公道レースに参加し始めた。

そこでもシズルの才能は開花し、裏世界で名の知れたレーサーへのの上がっていったのだが……。

名が売れば妬む者も当然出て来る。

あるレースでシズルのバイクが走行中に火を噴き、軽い体は路上に叩きつけられた。

幸い命は取り留めたものの、腰をしたたかに打ち付け、下半身不随になってしまう。

走り続けて来たシズルは、初めて歩みを止めることとなった。

それからのシズルは生きる屍だ。

当初はバイクに乗れないからゲームに戻ろうかと思ったものの、かつてのような充足感を得ることはできなかった。

それどころか胸に去来するのはむなしさとわびしさだけ。

ついにはゲームパッドを床に叩きつけ、触れることすらしなくなってしまった。

もう、あの刺激を興奮を得ることは叶わない。

自傷行為で自分を傷つけ、血を見ることでのみ渴望が満たされる。もういつそのこと死んだ方が……、あの時死んでいた方が良かった……。

シズルの世界は黒く暗く塗り潰されていった。

それでも死ななかったのは、事故を起こした時に両親が見せた顔だった。

これ以上この人たちを悲しませたくないという思いだけが、生きる糧。

とは言え、ずっと何もしていないと死んでしまいたい衝動に駆られてしまう。

なのでネットで、何か面白そうなものがないかと探す日々。

そんなある日、何気に見た動画に目を奪われた。

それは将棋の早指し戦の一局だった。

しかも早指し史上最速で勝敗が付いた試合である。

シズルはその動画を何度も何度も繰り返し見た。

一日一週間一ヶ月。

見るほどにその早さを極めた一局に惹かれていった。

もしかしたら……、将棋に私の求めているものがあるかもしれない。

シズルは動画の視聴をようやく止めると、今度は将棋について深く追求し始めた。

ある将棋スレで話題が持ち上がっていた。

某将棋対局サイトの早指しで、連戦連勝している無敵のユーザーがいると。

その名はshizurun。

十分間の制限時間すら長いとも言いうように、一分将棋や十秒将

棋しか指さないshizuruは、高段者すら寄せ付けず、しかも時間切れではなく、きっちり詰ませて勝っていたのだ。

サイトに現れるのは深夜帯。

いつしかshizuruとの対戦を熱望するユーザーまで現れ始め、早指しが熱くネットをにぎわせ始めた。

それに目を付けたのが将棋サイトの運営会社だ。

運営はshizuruにコンタクトを取り、とある企画を持ちかけた。

メールを受け取ったshizuru——シズルは、その企画をすぐさま快諾する。

これなら自分を早さの、速さの先へと連れて行ってくれるだろうと踏んで。

そして次のバナー広告がネット中に展開された。

第1回早指し選手権「紫電戦」開催！

ただしネット対局ではない。

本戦は現実の会場で対面しおこなうものである。

しかも賞金百万円という破格の大会は、一回戦のシード選手がshizuruということもあり、話題を呼んだ。

shizuruに挑みたい者。

shizuruと対戦したい者。

shizuruを超えていると自負する者。

様々な思惑を抱いた者たちがネットの予選を勝ち抜き、現実世界へと抜け出した。

紫電戦の幕は切って落とされたのである。

進行役によってつつがなく開幕した紫電戦。

司会者の熱いトークとは裏腹に、今はまだ静かなものだった。

ところがいよいよshizuruの登場となった時、会場は一転して熱気を帯び始める。

紹介とともに壇上の下手袖から現れたのは、車椅子に乗った少女だった。

おい、かわいいぞ！ まさか女子高生？ てか、本当に女だったのか！

ざわつく観衆の視線を一身に浴びるシズルは、中央で停まり皆をゆっくりと眺める。

そして——右手をまっすぐ上にかかげた。

私が求めるのは早さの向こう側です。

振り落とされずに付いてこられるかしら？

そう言い捨てると、パチンッと将棋の駒を打ち付ける仕草をした。うおおおおとわき上がる会場。

一気にヒートアップした参加者たちは、そのままの勢いで試合へと突入する。

バチダンッバチダンッと高速で叩き鳴らされる対局時計。

一回戦は順当に決着が付き、ついに二回戦初戦でシズルの番となった。

俺はfuwa。

覚えているかい？

シズルは少し首をかしげ——知らないと言を横に振った。

くつ、ネットでは二十局対戦してるんだけどな……。

まあいい。

今日こそお前に勝って、俺が最速であることを証明してやる！

こうして始まった対局は、fuwaの先手。

fuwaが角道を開けると、シズルはいきなり5筋に飛車を振った。

ふん、原始中飛車か。

そんな奇襲戦法通用すると思うなよ。

fuwaは心の中でそう言い放つと、5筋の歩を突く。

バチダンッバチダンッと対局時計が打ち鳴らされ、局面はまたたく間に中盤へと入った。

なぜだ。原始中飛車の対策をしているはずなのに。なのに！飛車先の攻撃を止めることができない……！

fawaの受けをまったく寄せ付けず、玉頭目がけて駒が殺到していた。

すでに整備された定跡の向こう側。

シズルが将棋で早さを追い求めるひとつの手段として得た棋風だった。

思考を早く鋭く研ぎ澄ませ、早指しは浅い読みという常識を打ち砕く攻め。

局面を深みへと穿ってゆくドリルのような指し手は、fawaの王に鉄槌を食らわせた。

勝者shizuruー。

だが、勝ったはずのシズルは浮かない顔をしている。

だめね。あそこで二秒も熟考してしまった。

自己新にはほど遠い……。

三回戦目。

シズルの前に立ちふさがったのは眼鏡をかけたひよろりとした青年だった。

ふふ、こうしてあなたと直接対局できるなんて光栄です。

ですが、快進撃はここまで。

ぼくはこの日のためにあなたの棋譜を分析させていただきましたからどんな手も通用しませんよ。

自分の棋風をAI将棋とのたまった青年deepは、序盤の駒組みではシズルよりも評価値を良しと自己分析した。

しかし中盤になると様相が変わる。

なんだこの手は！？ か、解析不能——ッ！

得意とする終盤に入っても引き離され過ぎて間に合わず、人間コンピュータはものの見事に撃沈した。

四回戦目準決勝。

相手は、フリルたつぷりのゴスロリファッションを身にまとった、同じ女子高生らしき少女unyu。

ふん、随分と目立っているわねあなた。

でも、ネット将棋界の女神は一人で十分。

このunyuちゃんこそがトップアイドルなんだからね！

見た目とは裏腹に鋭い手を繰り出すunyu。

女性同士の、美少女同士の熱戦に観客たちも声援を飛ばす。

そんな中、擬音が聞こえて来そうな中央での激しい殴り合いを制したのはシズルだった。

中央を突破し、いよいよ詰めろになるかと思われたが、unyuの手

厚い受けがそれを阻む。

うふふ、この勝負貰ったわ！

ところが一瞬の隙を突き、玉頭の飛車ではなく、斜めから角が切り込んで来た。

まさに袈裟斬りの一閃。

あ……、と一瞬呆然となったunyuの手が止まり、シズルの返す刀で詰められてしまった。

く、くやしー！

という気持ちを隠し、ネット将棋界のアイドルを自負するunyuは笑顔を振りまいて退場した。

ふー。

シズルは控え室で頭を休めていた。

クリックするだけのネット将棋と違い、対局時計を押すだとか、相手の威圧だとか、ねたみそねみだとか、思考以外の部分での疲労も大きかった。

一見涼しげに受け流しているようでも、精神的にキている。ところがシズルの表情は澄み切っていた。

ああ、これだ。

レースで感じていたようなヒリつく感覚。

テレビゲームでは味わえなかった緊張感がシズルの渴望を満たしていた。

将棋を始めて良かった。

動画を見た時、確かに早指しにも惹かれた。

だけどそれだけじゃない。

盤を挟んで対戦相手との間に流れる緊迫感。

レースで言えば横並びでデッドヒートを繰り広げているような感覚をシズルは受けて取っていたのだ。

でも、心の底まで満たされているわけじゃない。

まだよ、まだ私の早さを、速さを最大限に引き出してくれる相手にめぐり会えていない。

ただどあとはい勝を残すのみ。

この試合が私をさらなる高みに押し上げてくれるといいんだけど……。

会場は固唾を呑んで二人の対局を見守っていた。

決勝の相手sudaは、伏せているものの奨励会に属していた。

ネットで日々腕を磨いていた時にシズルと対戦。

そして完膚なきまで叩きつぶされてしまったのだ。

奨励会のプライドが打ちくだかれた瞬間だった。

しかし所詮アマチュアと見下していたネット将棋での手痛い敗北

は、sudaの姿勢を大きく変えることとなる。

プロだけでなく、力戦志向のアマ将棋の研究もおこなうようになり、奨励会での勝率が飛躍的にアップした。

君が僕を変えてくれた。

感謝しているよ。

だからプロになる前に恩返しをしないとね。

sudaの早く鋭く冷静沈着な差し回しは、さしものシズルも手こずっていた。

ダメよ、こんなことじゃ最速なんて極められない。

もっと早く速く疾く鋭く！

突然伸び始めるシズルの指し手にsudaは驚きを隠せなかった。

ここからさらに伸びて来るなんて！

この子、本当にアマチュアか！？

シズルの猛攻にさしもの奨励会員も受け切れず——ついに詰まされてしまった。

ふうーとシズルがため息をつくとき、会場が喝采に揺れた。

紫電戦の優勝はsuzuruだー！

優勝した、したのに、心にはまだ埋まらない隙間がある。

シズルは胸元を握りしめる。

将棋も……私を満たしてくれないのかしら。

おめでどう！

突然かけられた祝福に我に返る。

すぐそばに壮年の男性がいて、小さく拍手していた。

だが、どこか物足りなさげだね。

心の内を見抜かれ、息を飲むシズル。

ならどうだい、エキシビジョンマッチをやらないかい？

世界最速のコンピューターとね。

男性が指を鳴らすと、上手袖から将棋盤が運ばれて来た。

これは電子将棋盤だ。

駒の代わりに電光表示される駒をタップして貰う。

本来の将棋とは勝手が違うかもしれないが、対局時計を叩く手間が省けるからより対局に集中できることだろう。

コンピューター将棋か……。

ネット対局する以前、いくつかのソフトと対局したもの、今ひとつ張り合いがなくなすぐに止めてしまっていた。

ふふふ、怖いかい？

男性の不敵な笑みにシズルは口の端を持ち上げた。

受けて、立ちます。

普段なら挑発になんか乗らせないけど……、世界最速という触れ込みに惹かれたのだ。

人が私に限界突破をさせてくれないのなら、機械にでも頼るしかない。

ねたみもそねみも気負いもない純粹な思考の勝負。

これならきつと――。

エキシビジョンマッチ。

世界最速コンピューター「BULB」との対局が始まった。

シズルが駒を動かせば、コンマの反応で応えて来る。

確かに早い！

大型スクリーンに映し出された局面は棋譜ソフトを早送りするかのようにめぐるましく変化していった。

シズルの額に汗が浮かぶ。

視線は盤面中央を見すえたまま動かない。

目で追わず、盤面すべてを捕捉する。

あらゆる無駄を排除して、ただただ早さの極みに突き進んでいた。もはや車椅子に座っているという感覚すらない。

それどころか手を動かしているのかさえ分からなくなって来る。自分の脳だけが宙に浮いていて、局面は思考そのままを投影してゆくように――。

早さの、速さの向こう側には何があるのだろうか。

幼き頃から追い求めていた世界にいつかたどり着けるのだろうか。きつと今回の結果も通過点でしかないのだ。

早指し戦史上最速の、非公式記録であったとしても。

シズルは、shizenはネットに現れなくなった。

色々憶測は飛んでいる。

早指しを極めたから。

いや、BULBの研究に手を貸している。

あるいは――また別の速さを追い求めているのではないかと。

将棋短歌

音を消し壊す世界をただ眺めてる割れた画面に駒滑り

どつともつと

指先を見ていたいから詰まさない君の時間は必死にさせる

清水らくは

ぼうぎんのすすむみちすじぐちよくなりたびびとざんでおうほへいと

畔風篤志

角交換してくれないの先生がきつとわたしが悪いことから

浮島

駒・zoneガールズ



金



角



飛車



銀

欠片食器



桂馬



香車



歩

イラスト
若葉

第六章 銀冠

青いリングの上に、レフェリーと二人の少女。

一人は、その手に魚の背骨のような剣を握っていた。名前はチャークー。そして持ち主の名は葡萄。

もう一人は、その手にSilver Swordと呼ばれる日本刀を握っていた。持ち主の名は銀。

銀は一気に葡萄との距離を詰めて武器を振るうが、チャークーに絡め取られてしまう。折られないようさつと刀を引く銀。眼鏡の奥の瞳が、ゆらゆらと揺れていた。

モニター越しに、戦いの様子を見守る青年がいた。その名は将。55地区チームのコマンダーである。

場所は、76地区、プリンキピウム。ドーム型施設の中では、地区対抗の団体戦「テーサウルス・シュトライト」が開催されていた。その三将戦。将の横に、戦いを終えた大柄な女性、飛車もやってきた。

「苦戦してるな」

「ええ、相性が悪そうだね」

「けどまあ、人間相手だから何とかしないとね」

55地区はすでに、大会の報酬である七つの玉石を手に入れている。いわばチャンピオンである。そんな彼女たちが大会に参加しているのは、来る日に備えての強化のためであった。

「厳しいな」

銀の攻撃は、ことごとく受け止められていた。かといって相手も攻めてくるわけではない。

「正直に行きすぎなんだ」

「アドバイスできるとしたらなんて言うんだ」

「待て」

当然その声は銀に届かない。銀は手を休めなかった。肩で息をし始めている。

「これで、決めるわ」

銀は刀を高く構え、一気に前に突き出した。チャークーも、高速で直進する刀をからめ捕るのは難しい、はずだった。

「速攻棒銀!」

その攻撃は鋭かった。ただ、葡萄の姿は銀の視界から消えていた。そして、下方から二本の脚が伸びてくる。銀の、伸びきった右手が絡めとられる。

「三角締めだ」

「Of no. 私でも狙う」

葡萄は自らの体重で相手の体を引き込み、首まで回った脚で頸動脈を締める。銀の目がうつろになつていき、手から刀が滑り落ちた。しかし、銀はそのまま落ちることはなかった。無理やり相手の体を持ち上げ、歩き始める。

「まずいね」

「Yes」

そのまま、葡萄の体をマットにたたきつける。これで失神して勝つパターンもある。しかし。

葡萄はうまく受け身を取りながら、足をさらに深く絡みつかせ、銀の右腕をしつかりとつかんだ。銀は、立ったままなす術がなくなつた。あとは、左手でタップするしかなかった。

「六勝一敗か」

今回は、香車の代わりに林檎がメンバーとして戦った。彼女も含めて、銀以外は皆勝つたのである。

「人間相手に一敗している場合ではないけれど」

「どうするんだ」

「銀ちゃんは……捨て駒になってもらうしかない」
将の顔は、いつになく陰しかった。

「相談？ 珍しい」

喫茶店。将の目の前に座っているのは妹の桂馬ではなく、そして銀でもなかった。

「これは、角ちゃんにしか頼めないことだから」

「わかった」

将は、テーブルの上に一枚の紙を広げた。

「なに」

「秘密兵器」

「必要なの」

「必ず」

将は、描かれた戦を指でなぞった。

「信じる」

「ありがとう。そして、これには角ちゃんの協力が必要なんだ」

「どんなこと」

「とても、頼みにくいことなんだ」

「いいよ、将はコマンダーだから」

「助かるよ」

そびえたつビルのようなもの。その前に、九人がいた。香車以外の駒ガールズ、将、そして林檎と木通。

「あれが……宇宙船？」

歩は首をかしげた。

「元々大人数が居住できるように作られたもので、移動できる

アパートみたいなものですよ」

説明したのは木通^{あけび}。隣で林檎が頷いている。

一行は、再び駒・zoneの外に出ていた。途中何度か使い魔に襲われたが、問題にできなかった。

クラウン・シールドの生き残りは四人。そのうち一人の翁猪^{おうい}は、

駒ガールズたちと敵対していない。実質残り三人であり、彼らを倒せば人類は大地を取り返せるのだ。しかし彼らを倒さなければ、生き残った悪魔たちの中で倒した悪魔も生き続け、いつか復活してしまう。そして何より、囚われた香車を助けることができない。

「人類の未来をかけた最終決戦だ。気合を入れていこう」

「もちろんですわ」

将の言葉に対して、一番ノリがいいのは金だった。

「おー」

いつもと変わらない桂馬。

「が、がんばる」

緊張気味の歩。

「ま、いつもどおりがいいさ」

少し緊張感のない飛車。

「うん」

感情の読めない角。

「……ふう」

そして、大きく息を吐いた、銀。

「よし……で、どうやって入るんだっけ」

「開くのを待つしかないですね」

ビルで言えば一階部分、大きな扉があるのが見えるが、のっぺりとしていて、鍵穴も見つからなかった。

「まあ、要塞として造られてるわけじゃない。一日に何度も開く」

林檎が言う。

皆が待つ姿勢を整えようとしているところに、草笛のような音が鳴り響いた。木通が、上空を指差す。

「言っていたやつです」

大きな両翼の影。手には巨大な斧を携えていた。

「ようこそ、人間たち……と裏切り者たち。俺の名は枇杷^{びわ}。この場で全員葬らせてもらう」

枇杷が、斧を振りかざして急降下してきた。皆が逃げようとする中、飛車だけが迎撃態勢を取った。

「飛車ちゃん！ 無理をしないで！」

「任せな。一目でわかったよ、相性いいって」

将の心配をよそに、飛車の顔は輝いていた。

「張り切り過ぎはよくないですよ」

いったんは身を引いた金だったが、飛車に駆け寄っていく。

「あれいくか」

「了解ですわ」

金の傘が、ぱつと開かれる。そして、その中に飛車の姿も消えた。

「立石流四間飛車！」

斧が上空から振り下ろされたが、それを防いだのは十字の剣だった。傘から飛び出た金は地面を蹴り、飛車の腰、そして肩を足場にして飛び上がる。意表を突かれた枇杷は、慌てて引こうとしたが遅かった。飛車は両手で枇杷の脇をつかみ、右ひざを胸板に突き立てた。

「あれが立てた石をよじ登るがごとく四間飛び上がるとい……」

将も初めて観る技に感心している。だが、すでに次の来訪者が迫っていた。

「誰」

角の鎌が、大木の方へと向けられる。二番目に気付いたのは桂馬。「におったことあるぞ、これー」

闘っていない者たちの視線が、一斉にそちらに向けられる。

「予定より少し早く見つかったしまいましたね」

「翁猪」

一歩前に出ようとした将を、歩が手で制した。

「いいですね。僕は確かに、次は敵かもしれないと言いましたし」

「あの使い魔も、あなたの仕業っ？」

「違いますよ。私はもう、あなたたちと戦うつもりはないですから。ただ……関わらないわけにもいきません」

飛車・金と枇杷の戦いは、決着がついていなかった。よろめいて着地した枇杷だったが、重傷を負った様子はなかった。

「お久しぶりですわ、翁猪さん。またお世話になれるのかしら」

「扉開いてくれるのかい、thank you」ここはあたしらに任せて先に行きな！ これ、一度言ってみたかったんだ」

飛車の言葉に動き出す将たち。それを追おうとする枇杷の前に、Cross Hammerが突き出された。

「元より全員相手に勝てるとは思ってなかっただろ、下っ端」

「負けるつもりで戦う馬鹿がどこにいる！」

枇杷の斧が振り回され、飛車と金を襲う。二人はステップを踏みながらそれを避けていく。

「まあ、そうですわね」

金の傘が、ぱつと広げられた。斧はそれに当たらなかったが、辺り一面が金色に染まった。

「金粉」

枇杷の動きが、止まった。そこに十字剣が振り下ろされる。とっさに柄で受けた枇杷だったが、勢いに押されて片膝をついた。

「もらいましたわ」

金色の霧から現れた金は、枇杷の膝を踏み台にして、再び胸板に膝をたたき込んだ。

「こんなものでは……」

「もちろん止めも刺してあげますのでご安心を」

二度の打撃で傷んだ箇所にも、Gold Parasolが突き刺さった。

「Good!」

「まだだよ」

枇杷は傘をつかんで、引き寄せた。驚く金の手を握る。

「土産だ」

金色の傘は、枇杷の体を突き抜けた。そして、金の左腕から鮮血が飛んだ。枇杷の鋭い歯が付けたものだった。

「金ちゃん!」

「大丈夫。勝ちましたわ」

使い魔の体は、崩れ落ちた。

「けど、その腕」

「痛いということは生きている証ですから、心地よいものですわ。

さあ、皆を追いましょう」

「OK」

金は、傘を拾った。

一行は、扉の前に立っていた。のっぺりとしていて、手をかける場所も見当たらない。

「これは、あなたの星のテクノロジーですか」

「そうでもない」

翁猪は翼をはためかせ、飛び立った。そして扉の一番上に手をかけ、一気に引き下げた。

「おー、予想外だー」

「僕たちにも扱いづらいので、こんな感じにしてみました」

皆一応身構えながら中に入ったものの、中に見張りがいることも

なかった。

「本当に戦える使い魔はそんなにいないんです」

木通の説明。

「これまで、これほど戦うことを想定していませんでしたから」

前回、角が戦った時はクラウン・シールド一人と対するのが精いっぱいだった。悪魔は人間に苦戦した経験がないのである。

「それに、年々使い魔を保持する余裕がなくなってきたようです」

「なるほどね」

将は、宇宙船の中を見上げた。側面は通路がらせん状になって伸びており、真ん中には一本の円柱が建っていた。

「エレベーターですが、使ってません。私たちには翼がありますから」

「……ということは、この船は？」

「お察しがいい。僕たちが作ったものではありません」

「また別の宇宙人ということですか」

「そうです。たまたま私たちの国に落ちてきたのを奪ったんです。おかげで一気に僕たちの国は勢力を増した。そして……星ごと危機に陥ったんです」

「バランスが崩れるとそうなるのね」

銀が、剣先を真上に向けた。

「木通、説明が違う。力が圧倒的過ぎて、もう使い魔は必要ないんですよ」

「ええと……きせい!」

黒く大きな翼がはためいていた。桂馬が珍しく険しい顔をしている。

「鳴陣めいじんと香車さんは上にいるはずですよ。向かってください」

「え、でも……」

「本当の敵は、まだなんですよ」

将は、頷いた。

「行こう」

だが、すでに寄勢^{きせい}は一行の目の前にいた。

「残念。全員死です」

「そうはいかなーい！」

飛び出したのは歩だった。

「そうぞー」

小柄な二人が、両側から襲いかかる。寄勢の両腕に丸い盾が出現し、爪と蹴りを受け流す。

「何度やっても同じです」

「本当にそうかな」

ものすごい勢いで直進してきた翁猪の体当たりが、寄勢の体を後方に吹っ飛ばした。翁猪の目は爛々と輝き、口から牙がはみ出している。

「翁猪、あなた……」

「あなたたちは嘘をつき続けた。もちろん加担したのだから同罪だ。けれども……いつかけじめはつけるつもりだった」

部割と毛が生え、体中を覆っていく。声も低く、重たくなっていた。翁猪の姿は、今や翼のある獣だった。

「違います。あなたは自分を押し込めるのに疲れたんです。いつか私と戦いたかった、そうでしょう」

「どうだろうね。ただそれだけじゃない。さあ、人間たち、行きなさい」

「では、お言葉に甘えて」

翁猪の変貌に目を丸くしていた将だったが、判断の切り替えは早かった。クラウン・シールド同士で戦ってもらえるならば、とてもありがたいのだ。

「そうはさせないですよ」

寄勢が手を挙げると、上方からいくつもの大きな板が降ってきた。角が将の襟をつかんで、遠くに投げた。すんでのところで皆逃げることでできたが、床に突き刺さった板が一つの壁となつて、さらには天井となつて将たちと翁猪たちを隔ててしまった。歩と桂馬が、壁の向こうに取り残されてしまった。

「駒娘は二人ですか……。まあ、せっかくだから私に殺されなさい」

「そんなことには、ならないっ」

「僕も、そう思うぞー」

銀が壁に切りかかったが、傷一つ付けることができなかった。

「とりあえず……香車ちゃんを探そう」

「でも……」

「大丈夫。二人とも強いから」

「行こう」

将と角に促されて、渋々銀は首を縦に振った。林檎と木通を合わせて、五人は上へと向かった。

「気配が、ここから」

角が立ち止まって、扉を見る。

「確かにいそうだ」

扉の上には、よくわからない大きな文字が描かれていた。角は将を手で制して、思い切り鎌を振るった。扉は砕け散った。

「意外ともろいものね」

銀が破片をつまむ。

「居住スペース、と思う」

角、銀、将の順番で部屋の中に入っていく。そこには木が一本生え、枝に男が腰掛けていた。身長はすらりと高く、背中からは赤い

翼が生えていた。全身は白く、頭部だけが黒々としていた。

鳴陣だった。

「あ、あなたたちですか。寝ていたんですけどね」

鳴陣はゆつくりと目を開いて、そして三人の顔を順番に見た。

「寄勢さんが負けたとは思えないんですけれど。ああ、翁猪さんですね。まったく、困ったものです」

じやらり、と鎖の音がする。しかし、そんなに大きくはなかった。

「やっぱり」

「まさか、安心したんですか？ 言っておきますが、これでも負けません」

枝の上に立ち上がった鳴陣の周りで、四本の鎖が揺らめいている。

「最初から、全力」

角が、キャスケットを脱いだ。小さな角が姿を現す。そして、背中から翼が芽生える。

「あ、それでいいですよ」

鳴陣が飛び立ち、角もふわりと体を浮かせた。空中で向き合う二人。

「銀ちゃん、わかってるね」

「うん」

銀は将の言葉に頷き、刀を構えた。額から、汗が数粒落ちる。

角の鎌が、鳴陣へと伸びていく。四本の鎖がそれを弾くが、力強さはない。徐々に押していく角。壁際まで追い詰めたところで、鳴陣は大きく咆哮した。一瞬身を丸めた角。そこに、口の中から現れた、新たな鎖が襲いかかった。

「それは、どうなの」

さすがによけきれず、足を打たれて角はバランスを崩す。

「そろそろ……」

「まだだ」

右腕に力を込めた銀を、将は手で制した。

「助けるためにじゃない、勝つための一手を」

角が体勢を立て直す間、鳴陣は動かなかった。息が荒い。

「無理を、してる」

「あ、気付いてましたか。でも、無理をしないといけないんですよ。私が頑張らなければ」

鳴陣の鎖が、蛇のようにするすると動いて角を襲った。そのうちの二本を、釜が叩き切った。しかし残りの二本が、角の両足に巻きついた。

「下から私を狙っているようですからね。あなたを早く仕留めないと……」

その時だった。突如部屋の明かりが消え、暗闇が訪れた。上方からばきばきと音がして、何かが降ってくる。

「なんですか」

鳴陣は首を左右に振ったが、何も見えなかった。その隙に角は何度か鎌を振るって、鎖を断ち切った。

「木通か」

「今？」

「見えてから」

「わかった」

再び部屋が明るくなった時、鳴陣の目の前には棘の付いた鉄球があった。モルゲンスティンだ。

「もらったあああつ」

林檎の渾身の一撃が、鳴陣の肩に食い込んだ。しかし、鳴陣は全く意に介せず、左手で林檎の顔をつかんだ。

「その武器は通用しないのですが。あなたが知らないわけではないのに」

「もちろん」

そのときだった。銀の左手から、矢のように刀が放たれた。思い切り右手で押し出したのだ。

「銀捨て！」

一直線に鳴陣へと向かっていった刀は、彼の右の翼を貫いた。

「あ、こういうことだったんですね」

鳴陣の体が傾いた。そこに、大きな鎌が追い打ちを透ける。左の翼が、大きくえぐられた。

「知っていたんですか、私たちの目のこと」

「銀ちゃんと金ちゃんの、推測。鳥目だろうって」

「星を越えて、ですか……」

左手を伸ばして刀を抜こうとした鳴陣だったが、しっかりと刃が食い込んでいた。

「このために、わざと切れ味を悪くしておいたんだ」

将は、見上げながら言った。

「他のすべての攻撃を、諦めて」

銀が、深くうなずいた。彼女は一撃のためだけに、何度も同じ技を練習し、そして見事成功させたのだ。

「さすがです。そして、ほっとしました」

部屋の中に、木通が入ってきた。鳴陣は、翼をなんとか揺らめかせて、ゆっくりと地面に着地した。

「よかった、うまくいったようで」

「木通さん、やはりあなたでしたか」

「鳴陣様……この部屋の構造は、知っていたので」

鳴陣は、笑った。

「この星は、強かったです」

角が、一歩前に出る。

「香車ちゃんは？」

「大丈夫。彼女に、託しましたから」

「託した？」

二人のクラウン・シールドが、抱き合うようにして倒れていた。まだ、息はある。

「さすがです、翁猪」

「これぐらいで褒められちゃあねえ」

翁猪は何とか首を動かし、二人の少女を見た。

「ここで二人討死でもいいんだけどよ、まだしなきゃならないことがあるんだ。こいつにとどめ、刺してくれ」

桂馬と歩は、顔を見合わせた。そして、靴と鉤爪を見た。

「わかったっ」

歩は、二人に近付いていき、鉤爪を振り上げた。

「託したよ、翁猪」

胸を貫かれた寄勢は、カッと目を見開いて、口元を緩めた。

「あ、説明すると長くなるんですけど。とにかく、私たちの旅は、そのためにあったんです」

「よく、わからない」

「奥の部屋に行きなさい。あ、ちゃんと死なせてくださいね」

「説明は」

「槍のお嬢さんに聞けば分かります」

「わかった」

鎌が、空気を裂き、そして鳴陣を裂いた。体が、崩れ落ちる。

「やっ……終われます……」

「お待たせ！」

「飛車ちゃん、空気を読まなかったみたいですね」

勢いよく部屋に入ってきたのは飛車、そしてゆっくりと入ってきたのは金だった。

「二人とも無事でよかった」

「コマンダーさん、あたしたちが負けるわけないだろうって」

「皆様も無事、クラウン・シールドを倒したようですね」

「まだ、いる」

ここまで倒されたクラウン・シールドは、将たちの知る限り四人。二人は下で戦っている。まだ見ぬ七人目がいるはずだった。

「奥、らしい」

「あれか」

確かに部屋の奥に、扉があった。他のものとは違い、両側に開くタイプだった。

「開閉ボタンがある」

「改造されてないのね」

「あたしが行こう」

飛車が前に出て、勢いよくボタンを押した。だが、何も起こらない。

「あつれー」

「なんで上が『開く』だと決めてかかってるんですか」

「あー、そりやそうか。Open!」

今度は下のボタンが、勢いよく押される。扉が、開き始めた。身構える一同。

「なんだ、これ」

将の口から、声が漏れる。皆、同じ思いだった。

部屋の中には、大きなぬいぐるみが溢れ返っていた。人よりも大きなものもある。

「宇宙生物だな、どれも」

飛車は、額に手を当てて全てを見回す。足が八本ある獣。翼のあ

る亀のようなもの。どのぬいぐるみも、地球上の生物とは違う形態をしていた。

「香車ちゃん!」

その中に埋もれるようにして、少女の姿があった。駆け寄っていく一同だが、途中で足を止めた。香車の腕の中に、赤い影が見えたのだ。

「まさか……」

将は、口に手を当てた。

小さな翼が、ことん、と揺れた。あどけない顔、柔らかそうな桃色の毛。それは明らかに、悪魔の姿だった。

「推測の通り、この子供が笠皇」

香車は立ち上がり、笠皇へと視線を落とした。笠皇は、少しずつ目を開いて、そして、笑った。

「なんで香車ちゃんが」

「鳴陣から、依頼されたの。皆が存在しなくなった後の取り扱い方を教授された」

「つまり、託された」と

「そう」

「でも、敵だよ」

「了解している。ただ……」

香車の腕から抜け出した笠皇が、その姿を消した。そして次の瞬間、将の鼻の先にいた。

「やあ」

「うわっ」

「そんなに驚くことないじゃないか。軽いから、早く跳べるんだ」
「離れなさいな」

金が、笠皇に傘を向けた。すると今度は、一瞬でその先に爪先立ちをした。

「あは、ちよつと体が重いや。これは、鳴陣の分か」

「あなた、何なんですの……」

「この子供は、死亡した悪魔達の魂を内包している。すでに、五人分」

「そうなんだよ、はっはー」

次の瞬間、笠皇は金の肩の上に乗っていた。

「では、この子を倒せば全て解決なんですのね」

「恐らく、無理」

金の左の拳が、笠皇を襲う。しかし、拳は空を切った。そして金の体は、宙を舞った。

「金ちゃん！」

「まったく見えなかったぞ、おい！」

何とか受け身を取って、金は立ち上がった。

「やっほー、こつちだよー」

笠皇は、今度は角の鎌の先に立っていた。角が鎌を動かすと、笠皇の膝が角の腹部にめり込んでいた。角の体が崩れ落ちる。

「勝てませんよ、誰も」

そこに現れたのは、ぼろぼろになった翁猪だった。桂馬と歩に両脇を支えられていた。

「翁猪さん……ということは寄勢は」

「死にました……というか、今はその子の中にいます」

「やっぱりー、すごく重くなったもんね」

駒ガールズと、二人のクラウンシールドが一つの部屋に集合していた。皆、翁猪へと視線を向けている。

「五人分の魂があるので、かなり遅くなったはずです。本来の子ならば、まず誰にも負けません」

「僕たちに勝ち目がないと」

「はい。私たちには、めったに新しい命が生まれません。そんな

か、何百年に一度、その子のように圧倒的な強さを持った子が生まれるのです。その子を王として、新たな秩序が築かれる……はずでした」

「しかし、彼が成長する前に戦いになってしまった」

「はい。だから、この子を守るためにもむ逃げ延びる必要があった。この子さえいれば、いずれ星に戻り、私たちの国を再建することもできます」

将は、翁猪に近付いていった。

「僕たちはどうすればいいんですか。負けると言われて、はいそうですかとは言えない」

「そちらのお嬢さん……香車さんですか……は教えてもらったと思うのですが、その子はすでに強いですが、まだ殺意というものを知りません。今のもあなたたちとじやれていただけです。愛情を持って接すれば、決して攻撃してきません」

香車が手招きすると、笠皇はニコニコしながら彼女の腕の中に収まった。

「つまり……あなたが敵でないとするのなら、もはや敵はいないということですか」

「そうとらえたいならば」

「僕からも一つ提案があつたんです。駒ゾーンが解消されれば、僕たちは寿命が延びて、人間の尊厳を回復できるかもしれない。けれども病氣やけがと向き合うことを忘れてしまっているんです。だから、一気にはなく徐々に元の世界に戻していきたい」

「もつともです」

「とはいえあなたたちも魂は必要でしょう。これは政府も了解済みのことです。宇宙船の開発に協力します。あなたたちが星に帰る準備ができたなら、完全に駒ゾーンを解除する……どうですか」

「ありがたいことです。……ただ、一つだけ否定させていただきます」

「何を」

「あなたたち、と言いました。でも、私はもう限界なんです。もちろんしばらく休めばいいのですが、戦えない体で過ごしたくありません。ここで、終わりにします。鳴陣もそれがわかっていて、香車さんに託したのでしょうか」

両腕を上げて、翁猪は一人で前に進んだ。

「どうすればいいですか」

「せめて最後は戦って死にたいのです。駒ガールズと、勝負して」

将は、ぐるりと首を回して、皆の顔を確認した。そして、その人の顔を見て、言った。

「銀ちゃん、君が戦うべきだと思う」

将が銀に歩み寄っていく。

「私……？」

「銀ちゃん、その……ずっと心配だったんだ。悩んでるのはわかってた。でも、あの日……駒ガールズを作るって決めた日から、一番大事なことは銀ちゃんが締めるべきだと思ってた」

誰かがヒューヒューとはやし立てた。将は確認しなかったが、大きな剣を持った女性に違いない、と思った。

「私……でも、刀が……」

銀のSilver Swordは鳴陣の翼に刺さったままだ。しかも、わざと切れ味が悪くされている。

「ちゃんと、用意してあるよ」

角が歩み寄って、手にしていたものを銀に差し出した。それは、銀色に輝く両刃の剣だった。

「これ……」

「クイーン時代の。将が、加工した」

「えっ」

将が、頷いた。

「本気で捨て身の一発を放つには、これがあることを知らせられなかったんだ。でも、捨て身の一発で終わったら、銀ちゃんの戦いは中途半端で終わってしまうと思った」

「本当に、私なの」

「銀ちゃんなんだよ」

銀は、角から剣を受け取った。そして、何回か感触を確かめるように素振りをする。

「使いやすい」

「愛の、力ね」

「愛？」

「角ちゃん！ さ、銀ちゃん、仕事だ」

翁猪は、静かに立っていた。少しだけ、口の端が上がっている。

「私は、本気です。だから、気を付けて」

「わかりました」

銀と翁猪は、真正面から向き合って、しばらくお互いのことを見つめていた。銀は、しつかりと両手で剣の柄を握り、息を吐いた。

「行きます」

剣を横に構えて、銀は駆け出した。翁猪も体勢を低くして、一歩前に踏み出した。

「さあ、来なさい」

剣が、半円を描いて翁猪に襲い掛かる。悪魔は、避けなかった。

胸で受け止め、そのまま両手を突き出す。勢いに押されて、銀の体が沈み込んだ。

「ぎんころりーん！」

「大丈夫」

将は、妹の頭をポンポンと叩いた。

もはや翁猪には前に進むだけの力がなかった。それでも大きな体を、押し付けるようにして銀の体を圧迫していく。

銀は右手で翁猪の顎をつかみ、左手でつかんだ剣の先を、のどに押し当てた。しかし、片腕では押し込めない。

「銀冠！」

銀は鐐を噛み、頭をねじ込むようにして剣を押し上げた。少しずつ食い込んでいく刃先。

「それでいいです」

翁猪は、両手を広げ、視線を上になげた。

「笠皇を、頼みましたよ」

剣が、のどを突き抜けた。銀の眼鏡が、飛んだ。

「あつ、ずしんときたよ」

笠皇が、胸に手を当てた。

「終わった」

将は、手を合わせた。続けて、飛車が、歩が、金が、香車が、角が、桂馬が、そして、木通が、林檎が手を合わせた。

「そうするもんなんだねっ」

そして最後に、笠皇が手を合わせた。静かな時間は、しばらくやまなかった。

「ぎーんころーりーん！」

桂馬の大きな声が響く。

「おはよう。でも、ころりんではないのよ」

銀の美しい声が返ってくる。

「あ、あの、おはよう」

将の小さな声も。

「おはよう。そういえば、いよいよ今日なのよね」

「ああ。うまくいくといいけれど」

三人は並んで、学校に向かった。いつものような、特に何もない日常……に見える朝。けれども、駒ゾーンの中で大変なことが起こっているのを一部の人間だけが知っていた。

「うまくいくと思うぞー、今までうまくいったからー」

「桂馬ちゃんは常に前向きね」

「うん、桂馬だからー」

「なんだよ、その説明」

いつものように学校に着き、いつものようにそれぞれの教室に分かれていく。ただ、今日はどこにも金と香車の姿がなかった。

二人はどこにいるのか。二人は、金の家、大きな屋敷にいた。

「さあ、今日からここがあなたの家ですわ」

金が、大げさなお辞儀をしてみせる。

「おつ、本当に大丈夫だ。すごいなつ、天才だなつ」

「当たってますけど、褒め過ぎですわ」

「この場所ならば、交代で誰かが存在出来る」

香車は、腕の中の笠皇に微笑んで見せた。

「でも、できれば香車がいいな」

「あらあら、まだワタクシの魅力に気づかないなんてかわいそうですわ」

屋敷の地下五階。ものものしい扉の向こうにある部屋は、修理されて以前の姿を取り戻していた。

「努力するよっ」

「あら、かわいい言葉」

駒ガールズと悪魔の戦いは、このようにして笑顔の結末を迎えた。しかし、彼女たちの戦いは決してこれでは終わらないのである。

終わり／続く

誘惑

清水らくは

そんな盤面を愛そう

積み重ねた失敗を

微笑んで見つめよう

泣いて苦しんで逃げ出した後に

戻ってきて笑って楽しんだら

バランスが悪い時もあるさ

運命が渋滞するときもあるさ

だけど君が君を信じる限り

裏面はいつか表になる

君はその誘惑を笑えばいい

誘惑に勝ってまず一勝だ

君自身の手で拓ける世界を

さあ見せてくれ

君自身の世界で

心と心を交差させよう

また飛車を取って

王将を取られたね

もう一局しようか

それとももう寝るのかな

いろんな誘惑があるね

おやすみ

そしておめでとう

正しい一日の君よ

君はいつも誘惑の前にいる

例えば飛車

手に入るときは

いつだって心が揺れるだろう

例えば詰める

気付かれないといいな

その思い顔に出ているよ

そういう笑って過ごせる話は

どんどん積み重ねていけばいいさ

笑って過ごせる話で

笑わせてくれればいいさ

君の誘惑の中には

笑えないものもあるだろう

こつそり二手指し

許されるなら待った

そして

そして

これ以上は言葉にしないよ

ねえ 心と心が

向かい合える限りの

夢と夢を

語り合える範囲の

あとがき

私は詰将棋を解くのが苦手なのですが、解答を見るのは好きです。一つの答えに向かって収束していくのは、とても美しいと思います。これは、「詰将棋観る将」とでも言えるでしょうか。自分も作ってみたいと思うのですが、どうもうまくいきません。また過去作をそれほど知っているわけではないので、同じものや似ているものがあるかどうかよくわかりません。

この奥深い詰将棋の世界は、なかなか触れることのできないものです。けれども、触れられれば楽しいのです。そのように、将棋に関する「楽しみ方」というのはたくさんあるけれども、誰しもまだまだ触れていないものがあると思います。

今回はそんなわけで、詰将棋をはじめとして「将棋を楽しんでいる」と感じる方にエッセイをお願いしました。同じ将棋から枝分かれして広がっていく、様々な楽しみ方を実感してもらえればと思います。

……とこれを書いている今、将棋界は揺れています。どうなるのでしょうか。いいことも悪いことも、いろんなことが起こります。そんな中、私たちは良い距離感を持って接していくことが必要なのではないでしょうか……などと考えたり。

私は架空の将棋界について書いていますが、こちらも新しい展開が訪れました。今回の主人公は皆川さんです。彼女は、いつたいどうやって局面を打開していくのでしょうか。

そんなわけで、まだまだ続くことになりそうな駒・zone、次号をお待ちください。

編集長

執筆

會場健大

浮島

欠片食器

畔風篤志

涓滴

清水らくは

贅楽夢

兆葉

どっともつと

猫春雨

イラスト

若葉

使用フォント MS明朝・うずらフォント

駒. zone vol. 12
発行日 2016年10月25日
発行 無責任. zone
編集長 清水らくは